

# コロサイ人に贈れる使徒パウロの書狀

## 第一章

パウロ、神の寵によりてイエスキリストの使徒及び兄弟なる子モテ、三獻服をコロサイに居る聖徒等即ちキリストにありて信なる兄弟等に「贈る」

我等の父なる神及び主イエスキリストより恵と平和と汝等に「あれ」。

我等は恒に汝等に就きて祈るとき、汝等が豫め福音の眞理の音のうちに聞きしところの、汝等のために天に告へらる望のゆへに、イエスキリストに在る汝等の信仰と、すべての聖徒等に對する愛とを聞きて、主イエスキリストの父に感謝しまつる。此の願を眞に聞き、且つ善かに知りし日より、汝を結びつあるところなり。せ即ち我等の愛せらる、同じ奴僕なるエパフラヌスより汝等が學べるが如し、彼は汝等のためにキリストの信なる事へ人なり。彼は靈にある汝等の愛を我等に知らせたり。此のゆへに我等も「これを」聞きし日より、汝等のために祈り、且つ求めて居ます、是れ汝等が靈なるすべての智と識ともて汝を結び、且つ神の知識を増し、一彼の榮光の勢に備ひあらゆる力をもて強きせられ

つ、喜のうちには慈く耐へ且つ喜び、二我等をして光にある聖徒等の福樂の分を要くらに足らしめ給ふ、父に感謝せんためなり。三彼は我等を暗の權より扱ひ給ひて、その愛なる子の國に移し給へり。四我等はその血によりて、彼のうちに贖(即ち)罪の赦を領するなり。五彼は親えざる神の形におはして、すべての創造の長子なり。六如何となれば天に在るもの、また地に在るもの、細ゆるもの、また觀えざるもの、或ひは位、或ひは位、或ひは長、或ひは權、すべてのものは彼のうちに創造せられたるが故なり、(即ち)すべての物は彼によりて、また彼のために創造せられたるなり。七まされば彼はすべてのものより先におり、且つすべてのものは彼のうちに保たれるなり。八また彼は體(即ち)集會の頭にておはします、彼は初にして、すべてのものうちに首位とならんために、死人のうちよりの長子におはせり。九如何となれば「神は」彼のうちに圓滿を盡く住ましめ給ひ、三且つその十字架の面によりて平和をなし、彼によりて或ひは地に在るもの、或ひは天に在るもの、すべてのものを已に和しがむることを憐れ給ひしが故なり。三即ち汝等は皆て惡しき行(罪)のために、その思にて離れたる者、また敵なりしが、今彼は和せ給ひたり。三「是れ彼の肉の體をもて、その死によりて汝等を理なき者、また實むべきところなき者」として、彼の前に歸けしめ給はんとせり。三汝等もし信仰に留まり、堅く立ちて動かず、汝等が聞きしところの福音の望より移されずば「かく感ざることを得べし。これ天下のすべての創造に宣べられしこと

名、我ハキロコト事人となりしものなり。二爾今われは汝等のために受くる苦のうち在りて喜び、且つ彼の體(即ち)集會のために、我が肉に於てキリストの體の足らざることを滿たしつあり。三我は汝等のために、神の言を滿たさしめんとして、我に與へ給ひし神の處置に俯ひて、これが事人となりたり。四是れ世々より、また代々より隠れたる奧義なれど、今彼の聖徒等に顯はされたり。五神は彼等に國人のうちにある、此の奧義の榮光の富の如何を知らしむることを欲し給ひき、此は汝等のうちにおはすキリスト、榮光の望なり。六我等はキリストイエスに在る完き者」として、人々を贖げんために、すべての智慧をもておのおの人を諭し、且つおのおの人を救へつて彼を宣傳す。七我もこれがために、力をもて我がうちに働

第二章

そは我は汝等及びコサキヤに在る人々、並に肉の我が體を擧ぐる人々に就きて、如何に大なる國を行するかを、汝等の知らんことを欲すればなり。二是れ彼等の心愛をもて結合し、且つ確なる議のすべての富のため、父なる神の奧義、即ちキリストの知識のために顯されんためなり。三智慧と知識との寶は、すべて彼のうちに秘めらるなり。四まされば福音をもて、誰も汝等を欺くことなからんために、我かく云はん、五それは假令われ肉に於ては汝等を離れ居ると雖ども、靈にては汝等と共に在りて喜びつ、汝等が珠(寶)と、キリストに在る汝等の信仰の堅とを觀ればなり。六是の故に汝等は主なるキリストイエス

を受けられたれば、七汝等が教へられし如く、彼に根ざし、且つ建てられ、また信仰に堅うせられ

て、感謝に溢れつつ彼に在りて歩め。

八視よ、恐らくはキリストに預はす、人の言ひ傳に預ひ、世の小教に預ひて、折敷即ち空し  
き衆によりて、汝等を擲み去る者あるならん。九如何となれば、すべて神たることの圓滿は、  
彼のうちに體として住むが故なり。一〇されば汝等は彼に在りて完うせらるるなり、彼はすべ  
ての長と權との頭にておはすなり。一一次等も彼にありて手にてせざる割贖、即ち肉なる罪  
の體を踏ぎ去り、キリストの割贖にて割贖せられたり。一二即ちバプテスマをもて、彼と同  
に葬られたれば、それをもて、汝等も死人のうちより彼を起し給ひし神の行の信仰によりて、彼  
と同一に起されたり。一三また汝等は己が罪事と、肉の割贖なきとのために死人なりしが、彼  
「神」は我等にすべての罪事を恕して、彼と同一に活かし給へり。一四即ち我等に連らひ、我  
等に反ししところの命の手齋を抹り消し、且つこれを十字架に釘して、眞中より取り去り給ひた  
り。一五かくて彼はそれをもて長と權とを制ぎ、これを凱旋の飾となして明かに見はし給へり。  
一六是の故に益激にて、或ひは飲物にて、或ひは御餐、或ひは新月、或ひは安息日の日にて、  
誰も汝等を讃ぐこと勿らしめよ。一七此等は將に來らんとするもの影なり、されど體はキリ  
ストにつく。一八故意に離ることと、天使を信心することをもて、誰も汝等の褒美を欺き取  
ることなからしめよ。彼は親しこと無き事立ち入りて、己が肉の意より空しく傲ぶれども、

第三章

一頭を保たざるなり。されどすべて體はこれに屬き、筋と維とによりて交へられ、また結  
合し、神の膏を（受けて）膏つなり。三是の故に汝等もし世の小教より離れてキリストと同一  
に死にたりとせば、何故に世に生くるが如く汝等は念に服ぶや。三把る勿れ、味ふ勿れ、捫  
る勿れ、三此等はみな、用ふるるときは壞るものにて、人の儀と教とに預ふなり。三此等  
は故意の禮拜と、謙と、懺を惜まざることをもて、如何にも賢聖ある如く見ゆれども、肉の満足  
に對しても、何の價値もなし。

第三章

是の故に汝等もしキリストと同一に起されしならば、上なる物を祭めよ、キリ  
ストは神の右手に坐し給ひて、そこにおはします。二次等上なる物を念へ、  
地に在る物を（念ふ）勿れ。三それは汝等は死ねり、かくて汝等の生はキリストと同一に、神のう  
ちに隠れておればなり。四我等の生なるキリストの頭はれ給ふとき、そのとき汝等も彼と同一に、  
榮光のうちに入はざるなり。  
五是の故に汝等の眼、地に在る物、即ち淫行不淨、情慾、惡しき慾、また慈心をして死人  
たらしめよ、是れ偶像嚴事なり。六此等の事のゆへに神の慈は、不順の子等の上に来るなり。  
汝等も村て此等の事のうちに生きつつありしときは、彼等のうちにて歩みたり。八されど今  
汝等も此等のすべての事慾、或、惡意、或、汝等の口の單づべき言を棄てよ。九互に憐る如  
れ、汝等も人をその行爲と同一に愛き、こゝ且つ新しき人即ちこれを創造し給ひし者の

形に宿ひて、知識に至るまで新にせられし者を捨てたればなり。二そこにキリシヤ人とエヂヤ人、割禮と無割禮、夷、スクラヤ人、奴僕、自由人あることなし、されどキリストはすべてにて、すべてのうちにおはします。三是の故に「汝等ハ神の選民、聖徒、また選せらるる者として、憫、慈愛、寧運、忍耐を捨て、三誰かもし誰かに對して恨みきことありとも、互に推し互に怨せ、キリストの汝等を恕し給ひしが如く、汝等もその如くせよ。一四されど此等のすべての事のの上に愛を加へよ、此は完全の繼なり。一五かくて神の平和をして、汝等の心に言たらしめよ。これがために汝等も一體のうち召されたるなり、されば感謝すべき者となれ。一六キリストの言をして汝等のうちに、すべての智慧をもて豊に住ましめ、静と謙美と盛なる歌とをもて互に欲へ、且つ謙し、互にありて汝等の心をもて、主に向ひて歌へ。一七またすべて言をもて、戒ひは行をもて、汝等の偽すところの事は、盡く彼によりて父なる神に感謝しつつ、キリストの名に於て「これを」言せ。

一八遊なる者と、己が夫に服へ、主に在りて適ひたることなればなり。一九夫なる者と、妻を愛せよ、且つこれに對して苦からざれ。二〇兒なる者と、すべての事に双親に服へ、そはこれに慕せらるることなればなり。二一父なる者と、汝等の兒を激せしむる勿れ、是れその落膽することなからんためなり。二三奴僕なる者と、すべての事に肉に服へる主に服へ、人を喜ばす者の如く、目の前の事を務むることなく、神を畏れつつ誠實なる心をもてせよ。二三すべて

て汝等の偽すところの事は、人に對するが如くせず、主に對するが如く、魂より行へ。二四汝等は主より嗣業の嗣を受くることを知ればなり、そは汝等は主キリストに結ぶればなり。二五

それと不義を偽す者は、その偽しところのものを愛くべし、即ち偏頗あることなし。

第四章

主なる者と、汝等も天に非のおはすことを知れば、愛しきことと公平なることとを奴僕に與へよ。

二「汝等目を覺ましをりて、感謝のうちに祈りて餘念あらざれ。三我等のためにも、同じく祈りて「餘念あらざれ」是れ神の我等をしてキリストの真義を語たらしめんとて、宵の戸を開き給はんだめなり、これがために我も樂がれたり。四是れ我の必ず語らざらざるべからざる如くに、これを願はざしめ給はんだめなり。五「汝等」時を購ひつつ、外なる人々に對して智慧をもて歩め。六汝等の言をして恒に眞のうちにあらしめ、如何におのおのに必ず答へざるべからざるかを知らんために、騙をもて味つけよ。七我に係はる事は、主に在りて選せらるる兄弟にして、信なる事へ人、また同じ奴僕なるキリスト、汝等にすべてを知らしむべし。八我はこれがために彼を汝等の許に遣はせり、即ち彼は汝等に就きての事を知り、且つ汝等の心を亂まさんためなり。九「また彼は」汝等のものなり、信にして、選せらるる兄弟キリストを伴へり、彼等は此處なるすべての事を汝等に知らしむるなり。一〇我が因の俣たるキリストとパウロ、及びパウロの従弟なるテモコ、且彼に就きては汝等命を受けたり、彼もし汝等の許に來んばこれを愛す

けよ。」「一及びエストと云はるイエス、汝等に挨拶す。彼等は割禮の人々なり、我に取ては唯此等の者のみ、神の國のため同勞者にして、我が屬となりし者なり。」「汝等のうち者にて、キリストの奴僕なるエパラス、汝等に挨拶す。彼は汝等が完く且つ満たされて、神のすべの盡のうち立たんため、恒に汝等のために禱をもて闘ひつあり。」「三そは彼の、汝等またラオネキヤの人々、またヒイラポリの人々のために、大なる熱心を有することをわれ證すればなり。」「四醫士なるルカ、愛せらるる者、及びテマス、汝等に挨拶す。」「五ラオネキヤに在る兄弟等、及びヌンバと、その家に在る集會とに挨拶す。」「六また此の書狀、汝等のうちにて讀まれしときは、これをラオネキヤ人の集會にても讀ましめ、且つラオネキヤより「來りしものを汝等も讀め。」「七またアルキメに、主に在りて汝が受けし奉事を完うするやう視よ、と云へ。」「八われバコロ手つからの挨拶、我が標を憶ひ出でよ。萬汝等のうちにて「あれ」アメン。

テキコとオホシモに托して、ロコよりコロサイ人に書き贈れり。

コロサイ人に贈れる使徒パウロの書状 終り

テサロニク人へ贈れる使徒パウロの書状 第壹

第一章

パウロとシルヴァノとテモテ、啓蒙を父なる神及び主イエスキリストに在るテサロニク人の集會に贈る。我等の父なる神及び主イエスキリストより恵

と奉和と汝等に「あれ」。

「二我等は恒に我等の諸のうち汝等を憶ひ出で、汝等すべてに就きて神に感謝しまつ。」「是れ絶えず、神即ち我等の父の前に、汝等の信仰の行と、愛の勞と、我等の主イエスキリストの望の耐へ忍とを憶ひ出づればなり。」「四神より愛せらるる兄弟よ、是れ汝等の選ばれたることを知ればなり。」「五是は我等の福音の汝等に來りしは、密に旨に於てのみならず、されど力に於て、また聖靈に於て、また大なる保證に於て「來りしはなり。我等は汝等のゆへに、如何に汝等のうちに在りしかば、汝等の知るが如し。」「六かくて汝等は天なる親のうちにて、聖靈の喜と共に旨を受けりて、我等及び主に候ふ者となれり。」「七されば汝等はテサロニク及びアケヤに在る、すべての信仰する人々に對して型となりたり。」「八是は主の言は汝等より響き出でて、密にアケドニト及びアケヤのみならず、到る處に神に對する汝等の信仰は弘まられたり。」「九されば我等は何をも贈たるを望せず。」「十是は我等は我等に就きて、我等の入り來りし

とき、汝等に對して如何なる様にてありしか、また汝等は如何にして偶像より離れて神に歸り、生ける、即ち眞なる神に奴僕となり、一〇且つ天より「來り給ふ」とその子、死人のうちより起され給ひし後、來らんとする怒より我等を扱ひ給ふイエスを、待つかを知らしむればなり。

第二章

そは兄弟よ、汝等は親しく、我等が汝等の許に入り來りしことの、空しくならざりしことを知ればなり。ニされど汝等も知る如く、我等ヒリビにて先づ

苦を受け、且つ辱められしとき我等の神にありて應ずることなく、多くの團のうちに、汝等に神の福音を語られたり。三そは我等の變は惡にもあらず、また不淨にもあらず、また謫にもあらず、四我等は神より是とせられて福音を委ねられし如く、その如く語たり、人に寄はるるにあらず、我等の心を語し給ふ神に寄はるる如くしたればなり。五そは我等は汝等の知る如く、會て追従の言を用ひ、或ひは忿心の言葉を「用ひ」しことなく、非神は證人におほします、六また「我等は」キリストの使徒として能く堆れば、或ひは汝等よりも、或ひは他よりも、榮光を人より崇めしことなし。七されど我等は汝等のうちに在りて、乳人已自らの兒を養ふが如く、憐しき者とされり。八されば汝等を慈ひて、我等は齊に神の福音を汝等に願つのみならず、己自らの魂をも「與ふることを」懼とせり、如何となれば汝等は我等に憂せらるる者となりたればなり。九兄弟よ、汝等は我等の勞と、辛苦とを憶ひ出でよ、そは我等は汝等を少しも棄は

すことなからんために、彼も日も行をなしつ、汝等のために神の福音を宣たればなり。一〇「されば」我等は信仰する汝等に對して、如何に堪へ、また謙しく、また缺なくありしか、汝等は証人にして、神も「その證人におほします」。二「即ち」我等は汝等を、その國と榮光とのために、召し給ふ神に値して歩ましめんとて、二父が己自らの兒に於けるが如く、如何に汝等のおのを養ひ、また慰め、且つ慰せしかば、汝等の知るが如し。三此のゆゑに我等も經えず神に感謝しまつる、そは我等より聞かしたる神の言を受けしとき、汝等は人の言にあらず、眞にそのおのが如く、信する汝等のうちに働き給ふ神の言を受けられたばなり。四そは兄弟よ、汝等はエマタに於けるキリストイエスに在る、神の集會に做ぶ者となりたればなり。如何となれば、彼等もエマタより「言を受けたる」如く、汝等も己が國人より同じ言を受けたるが故なり。五彼等は主なるイエスと己が讒言者等とを經し、我等を遣ひ出たせり、且つ神に泣はれず、またすてのの人に逆らひ、六我等が國人に、彼等の救はるるために請はるることを禁じ、恒に己が罪を滿たさんとを力び。七されど彼等の上に怒來りてその極に達するなり。八兄弟よ、我等の一と時の間、汝等より引き離されたるは、心にてにあらざり、眞にてなれど、切なる願をもて汝等の救を見んことを望むるはかりに勉めたり。九かかるが故に、我等は汝等の許に來らんと欲したれど、非如何にもわれハクロは「一たびも」二たびも、非サタナ我等を妨げたり。一〇我等の望、或ひは罪、或ひは語の疑は何ぞや、或ひは我等の非イエスキリストの

前に、その來臨のときに汝等もあらざるか。○それは汝等は我等の榮光、また喜なればなり。

第三章

かゝるが故にもはや耐ふることをせず、唯我等のみ悦びてアモツスに描かれた

り。ニされば我等の兄弟にして、神の擧へ人、またキリストの福音に於ける

我等の同勞者なるアモツスを、汝等の信仰に就きて、誰も此等の難のために、動かさざることな

からんやう汝等を堅うし、且つ突めんために遣せり。○それは汝等は、我等のこれのために立て

られたることを、自ら知ればなり。○それは我等も汝等と僞にありしとき、我等は豫め汝等に

將に難を要けんとしてを云ひたればなり、これ汝等の知るが如し。○此のゆへに我らもは

や耐ふることをせず、試むる者の汝等を試みて、我等の勞の堅しなくならざるやう、汝等の信仰

を知らんために遣せるなり。○されど現にアモツスは汝等より我等の許に隣り來り、且つ我等に

福音を傳へ、汝等の信仰と愛、即ち恒に汝等は我等に對して善き憐ひ出を有し、我等を見入ると戀ひ

慕ふこと、我等が汝等に對するが如きを宣傳したり。○此のゆへに兄弟と、我等はすべての難

と、差し迫れる事とのうちにて、汝等につきては、汝等の信仰によりて勵まされたり。○即ち

汝等もし主に在りて堅く立たば、今我等は生く。○それは汝等のゆへに我等の神の前に、我等が

喜ぶすべての喜のために、汝等に就きて如何なる感謝を、我等は神に獻げ得べき。○我等は

汝等の顔を見んことと、汝等の信仰の足らざるを哀うせんこととを、夜も日もしきりに祈願し

たればなり。○されど神即ち我等の父自らと、我等の主イエスキリストとは、汝等の許に我

等の近を尋き給はん。○また主は我等の汝等に對するが如く、互に對し、またすべての人

に對する愛に於て、汝等を愛ならしめ、且つ凝らしめ給はん。○是れ汝等の心を堅うし給ひ

て、そのすべての聖徒等と共に、我等の主イエスキリストの來臨のときに、神即ち我等の父の

前に、聖に於て候なき者たらしめ給はんためなり。

第四章

是の故に兄弟と、その餘、我等は主イエスに在りて汝等に語り、且つ幾む、

即ち汝等は我等より如何に歩み、且つ神に喜ばれざるべからざるかを受けた

れば、増々それを大にせよ。○それは我等は主イエスによりて、如何なる命を汝等に與へしかを、

汝等知ればなり。○それは神の意は、汝等の聖くせらるること、即ち汝等を淫行より遠ざからし

め、○汝等のおのをして、己がものなる器を得るに、聖く真きをもてすべきことを知りて、

○神を知らざる國人の如く、情慾をもてせざらしめ、○此等の事に於て、その兄弟をば、

また剛かすことなからしむることなればなり。如何となれば我等の豫め汝等に告げ、且つ難に

置せし如く、主はすべて此等の事に就きて報をなし給ふが故なり。○それは神の汝等を召し給ひ

しは、不淨のためにあらず、聖くせらるるためなればなり。○さればこれを務察する者は、人

を務察するにあらず、神即ちその聖なる靈を我等に與へ給ひし者を、○務察するべしなり。

○兄弟の誰に就きては、我これを汝等に責き問を置せず、○それは汝等は互に愛することた

めに、親しく神に敬へられたる者なればなり。○それは汝等はアケラニヤの各地に在る、すべ

この兄弟等に此の事を爲したればなり。されば兄弟よ、我等の汝等に送けるは、汝等が皆々之

れを懲らんにし、一旦汝等に命ぜし如く、隠にし、また己が罪を行ひ、且つ汝等の手にて働

くことを懲らんとせんことなり。三是れ汝等の外なる者に對して、宜しきに避けて歩み、且つ誰

も是しき者のなからんためなり。

三兄弟よ、われ眠りし人々に就きては、餘の人々の如く汝等の、哀しむことなるべきと

とを知らざるを欲せず、一四 是れ我等もしイエスは死に給ひたれば、起き給へりて信仰せば、

その如く、酬はイエスによりて眠りたる者をも、彼とともに連れ來り給ふべければなり。一五

我等主の言をもてかく汝等に云はん、即ち主の來臨のときまで生きて存れる者は、必ず眠りし

者より先立たず。一六 是れ主自ら天使の長の聲と、神の喇叭の「聲の」のうちに、號令をも

て天より降り給ひ、かくてキリストに在る死人は、第壹に起ぐべければなり。一七 そのとき我

等生きて存れる者は、雲中にて主に遇はんに、雲のうちに彼等と共に登り去らるべく、か

くして我等は恒に主と共に在るべし。一八 されば此等の言をもて互に奨むべし。

兄弟よ、時と期に就きては、汝等は齊き歸らるるを要せず。二一 是れ汝等自ら

主の日は、誰人の夜に於けるが如く、その如く來ることを樂かに知ればなり。

三 是れ、平和「なり」また安全「なり」と彼等の云はんとし、そのとき忽ち汝の彼等に來るこ

と、孕める婦に産箱の「來る」如く、且つ必ず遁ることなればなり。四 されば兄弟よ、汝

等は暗のうちにならざれば、その日は盜人の如く、汝等に追ひ及くことなし。五 かくて汝

等は光の子また目の子なり、即ち我等は夜の「子」にあらず、また暗の「子」にもあらず、六

されば我等は他の人々の如く、眠らざり、目を醒ましをり、且つ素面なるべきなり。七 是れ

醒める者は夜に醒め、また酒に酔ふ者は夜に醒へばなり。八 されど我等は日の「子」なれば、

素面にして信仰と愛の胸笥を清く、汝の望を用「として」觀べし。九 是れ神の我等を定め給ひ

しは怒のためにあらず、我等の主イエスキリストによりて、汝を有たしめ給はんにためなればな

り。一〇 彼は我等のために死に給ひし者なり、是れ我等の或ひは目を醒ましをるとも、或ひは

疑ゆるとも、彼と共に生きためなり。一一 かるが故に汝等の爲しつあるが如く、互に奨め、

且つ一は一を建てよ。

三 また兄弟よ、我等は汝等に請ふ、汝等のうちに在りて勞する者と、主に在りて汝等の先

頭立つ者と、汝等を驗する者を知り、三 且つ彼等の行のゆへに、愛をもて殊にこれを賞ば

んことを互に平和にせよ。一四 兄弟よ、また我等は汝等を奨む、來なる者を諭し、小膽なる

者を慰め、弱き者を培へ、かくての人に對して恐はんとす。一五 根と、誰も誰に對しても、

惡をもて惡に返す勿れ、されど互に、またかくての者に對して、恒に善を道ひ求めよ。一六 恒

に次へ、一七 絶えず斷るべし。一八 事ごとく感謝せよ。是れ是れ汝等に對してキリストイエス

に在る神の恩なればなり。一九 榮を煇す勿れ。二〇 聲言を欺する勿れ。二一 かくての事を訂せ



よ、その良きものを堅く保て。三悪のすべての形より遠ざかれ。三、されば平和の神は自ら汝等を全く聖くし給ひ、且つ全く汝等の靈と魂と體とを護りて、我等の主イエスキリストの來臨のときに、缺なき者たらしめ給はん。四、汝等を召し給ひし者は徳なる者、彼は「これを」感し給ふべし。

五兄弟よ、我等に就きて祈れ。六、聖き接吻をもて、すべての兄弟等に挨拶せよ。七、我は主によりて、此の書状をすべての聖き兄弟等のために記されんとを汝等に命ず。八、我等の主イエスキリストの聖、汝等のうちにあり。アメン。

アゼンストリテサロニケ人に書き贈れる第壹書。

## テサロニケ人に贈れる使徒パウロの書状 第二

### 第一章

パウロとシルヴァノとテモテ、豫狀を「我等の父なる神及び主イエスキリストに在る、テサロニケ人の集會に屬す」。二、我等の父なる神及び主イエスキリストより恵と平和と汝等に「あはれ」。

三兄弟よ、我等は恒に汝等に就きて神に感謝すべき筈なり、是れ通常の事なり。如何となれば、汝等の信仰は益々増し加はり、且つ汝等すべての者の一人一人の愛は、互の間に露になりたればなり。四、されば我等は汝等が堆ふるすべての迫害と艱とのうちに「保つて」汝等の耐忍と信仰とのために、神の諸集會のうちに汝等に於て誇る。五、「是れ」神の義しき、汝等の義しき、汝等もこれがために苦を蒙くる、その神の國に汝等の使する者とせらるるためなり。六、汝等を難むる者には、酬ゆるに報をもてし、七、また難めらるる汝等には、主イエスのその力の使等と共に天より現れ給ふときに、我等と共に「死」をもてし給ひ、八、神を知らざる者には、また我等の主イエスキリストの福音に順はざる者には、痛の火をもて報を賜は給ふべし、九、少くとも神の前に義しきことなり。九、彼等は主の類より、またその力の榮光より、刑罰、水の滅を受くべし。一〇、そのときに彼は來り給ひて、その選提等のうちに榮光を賜はら給ふべく、ま

た信仰するすべての者のうちに懸望せられ給ふべし、是れ汝等に對する我等の證の信せられたるが故なり。二これがために我等も汝等のために恒に祈るなり、即ち汝等は我等の神の召に應ずる者とせられ、且つ力をもて、すべての善の徳と、信仰の行とを成就せんためなり。三是れ我等の神と主イエスキリストの恵に循ひて、汝等のうちに我等の主イエスキリストの名の榮光を歸せられ給ひ、汝等も彼に在りて頌められんためなり。

### 第二章

また兄弟よ、我等は我等の主イエスキリストの來臨と、彼の許に我等の集ふことのために、汝等に請ふ、三是れ汝等の、或ひは靈によりても、或ひは音によりても、或ひは我等によりての如き書狀によりても、キリストの口は押し迫りとして、忽ちその思のあわてもし、またふためくともなからんためなり。三誰も汝等を、如何なる手段にても、惑はすことなからしめよ。そは背教先づ來り、かくて滅の子なる罪の人の現はるにあざれば、その事あざるべければなり。四彼は逆らひて、すべて神と云はれ、或ひは崇めらるる者の上に己を高むる者なり。かくて彼は神の如くに神の聖所に坐し、己自らを見はして神なりとす。五汝等は我が御は汝等の許にありしとき、此等の事を汝等に云ひしことを憶ひ出ださざるか。六されど汝等は今彼の終ふるは、己自らの期に現はるるためなることを知れ。七そは不法の奧義、既に働きつゝあれはなり。八されどただ彼、控ふる者は、眞中より取り去らるるまで現に「在る」のみなり。九さればそのとき不法なる者は現はるべく、亦はこれをそ

### 第三章

の口の氣をもてばし、且つその來臨の輝をもてこれを燦らしめ給はん。九彼はサカナの働に循ひて、偽りもろるの力ある行と、微と、奇跡と、一〇不義の惡とをもて立つる者に到來するなり、如何とされば彼等は眞理の愛を、その救はるるために受けざるが故なり。一此のゆへに神は偽を彼等に信せしむるために、惑の働をこれに遣はし給はん。二是れ眞理を信ぜず、反つて不義を憎むる、すべてのもの裁かるためなり。三されど主より愛せらるる兄弟よ、我等は汝等に就きて恒に神に感謝すべき善なり、そは神は靈の聖めと、眞理を信することをもて救はるるために、初より汝等を選び給ひたればなり。四これがために、彼は我等の福音によりて汝等を召し給ひたり、即ち我等の主イエスキリストの榮光を有たしめ給はんとなり。五されば兄弟よ、確と立て、また我等の音によりてもせよ、或ひは書狀によりてもせよ、汝等が教へられし言ひ傳を堅く保て。六我等の主イエスキリスト、彼と神即ち我等の父とは我等を愛し給ひ、且つ基をもて、永の嗣と善き聖とを我等に與へ給ひたり。七彼は汝等の心を勵まし給ひ、且つすべての言と善き行とのうちに汝等を堅うし給はん。

その僞兄弟よ、我等に就きて祈れ、是れ汝等の許に「あるが」如く、主の首の起り、且つ願められたため、ニまた不道理なる、且つ惡しき人々より我等の覆はれんためなり。そは信仰はすべての「人」のものにあざればなり。三されど主は信なる者に「おほせば、彼は汝等を堅うし給ひ、且つ汝等をかの惡しき者より離り給ふべし。四され

は我等は汝等に就きて、我等の命ぜし事を〔現に〕爲し、また〔後〕爲さんとすに在りて確く信す。また主は汝等の心を導きて、神の愛とキリストの御愛とに入らしめ給はん。

六兄弟よ、我等は主イエスキリストの名に於て汝等に命ず、妄に歩むすべての兄弟、即ち我等より受けし誓ひ解に猶ほざる者より、汝等を選げよ。七そは汝等は、我等の汝等のうちに

〔在りし〕とき、妄にせざりしが故に、必ず如何に我等に倣はざるべからざるかを、汝等自ら知ればなり。八〔即ち我等は例なしに、誰に容りてもパンを啖ひしことなく、反つて汝等のうちの誰にも重得たらざらんために、勞と辛苦とをもて夜も日も働けり。九是れ我等は權を有せざるにあらず、されど我等に倣はしめんとて、己自ら汝等に勸を興ふるためなり。一〇そは我等の汝等の許にありしとき、誰にてもし働くことを欲せずば、食すこと勿らしめよ、と

の如く汝等に命じたればなり。一一是れ我等は汝等のうちに、戒る者は妄に歩みて働くことなく、反つて不望の事に奔走しつゝあるを聞けばなり。二されば我等はかくの如き者に、靜に働きて己自らのパンを食せんことを、我等の主イエスキリストによりて命じ、且つ禁む。三

また兄弟よ、汝等は誓を寫すに戒る勿れ。四されど誰かもし此の書狀によりての我等の言に順はずば、此の者を驅して逐おしむるために、これと同に交はる勿れ。五されど敵と思はず、されど兄弟として〔これを〕論ぜ。六さればいつれにもあれ、總て主平和の主は、自ら

汝等に平和を興へ給ふらん。主、汝等すべてのうちに〔おはせし〕。七パウロ自らの手にての授け、即ちすべての書狀に於ける記、かくなん我は書す。八我等の主イエスキリストの愛、汝等すべてのうちにあれ。アメン。

アゼンヌよりテカロニケ人に書き贈れる御紙。

テカロニケ人に贈れる使徒パウロの書狀 第二終り

# テモテに贈れる使徒パウロの書状 第壹

## 第一章

パウロ、我等の教主なる神また我等の望なる主イエスキリストの命に仰ひて、イエスキリストの使徒、ニ我等を信仰に在りて眞實なる「我が見テモテに贈る。我等の父なる神及び我等の主なるキリストイエスより進歩、平和派にあれ。我々のマケドニアに往かんとせしとき、汝に契めてエペソに留まり、或る者に命じて異なる教を傳ふることなく、且また徒なる物類と、際限なき系圖とに心を留むることなからしめし如く、此等のものは信仰に於ける神の位置を「示さん」とりは、反つて議論を來らすなり。又されど命の標は、淨き心と善き良心と儉なき信仰とに本づく要なり。又或る者はこれを擧げて、強言に送往せしむ、或る法師たらんと欲して、その云ふところも、またその断定することに就きても、解することなし。又されど人もし提は、これを難しき者のために設けられたるにあらざり、不法なる者、また不服なる者、不慮なる者、また願探しき者、聖かるざる者、また穢れたる者、父を殺す者、また母を殺す者、人を殺す者、或る罪行する者、男色を行ふ者、人を盗む者、偽る者、偽り偽る者、その他、健全なる教に逆らふ者のためなることを知りて、こゝに提しこれを擧げるときは、その長きものたることを我等は知る。二「提れ」我に委ねられたる、神の嗣なる衆

光の嗣業に預ひてなり。三我は我を力つけ給ふ候、我等の主なるキリストイエスに謝しまつる、そは我を信なる者と思ひ給ひて、(我を)此の塗事の<sup>まじ</sup>ために立て給ひたればなり。三われ業には冒せる者、また迫害する者、また侮る者なりしが、我はこれを知らずして、無信仰のうち<sup>まじ</sup>に爲ししか故に、懲を蒙れり。一四かくて我等の主の恵は、キリストイエスに於ける信仰と愛とのうちに豊になれり。一五キリストイエスは罪人を救はんために世に來り給へり、と云ふ言は信にして、余く愛くべき値あり、彼等のうちに我は窮乏なり。一六されど此のゆへに我は恩を蒙りしなり、即ちイエスキリストは、將に彼を信仰して、永の生に至らんとする者の模範を、先づ我に於て(示さん)とて、あらゆる耐へ忍を蒙らし給はんためなりしなり。一七世々の王、初ち子祖えざる唯一の智慧の神に、世々の世々に至るまで、敬と榮光とあれ。アメン。一八「我が兒子モテよ、繼に汝に係はる職官に預ひ、汝のこれをもて良き職を職はんとせ、われかく汝に命を授け、一九「即ち信仰と善き良心とを保てよ。或る者これを擲ちたれば、信仰に就きて破給せり。三〇そのうちにヒメチヨとアレキザントロとあり、われ從等の冒すことなかりんや、懲らしめんために、これをサマナに付したり。

是の故に我すべての事の第壹に、すべての人のために、王及びすべての高貴なる者のために、祈願、禱、執成、感謝を爲さんことを勸む。二是れすべて敬處と莊重とをもて、穩なる且つ落たる所備を我等の過さんためなり。三そは是れ良き事にし

第二章

て、我等の救なる神の面前に承けらる事なればなり、四彼はすべての人の救はれて、衆かに真理の知識に到らんことを欲し給ふ。五そは神は一におはして、神と人との仲保者も一、即ち人なるキリストイエスにおはせばなり。六彼は己自らを興へて、すべての人のために願とし給へり、その誠はその期々に立てらるるなり。七これがために我は立てられて、宣ふる者、また使徒となれり、我はキリストに在りて真理を云ふなり、偽るにあらず、(即ち)信仰と真理とに於ける國人の教師となれり。八是の故に我は人々の何れの處にても、怒と勘考とより離れて、聖手を擧げ祈らんことを欲む。九婦し婦も罪を知ること、謙とをもて、宣しきに過ひたる處にて己自らを飾り、聖を飾むこと、または眞珠、または價高き衣をもて「飾とせ、一〇神を敬ぶことを公言する婦に似合ひたる、謙遜行によりて「飾とせんことを欲む。一一「また」婦は赤き服をもて、謙かに學ぶべし。二三さればわれ婦に、敬ふことをも、男の止に權を行ふことを許さず、謙にあるべし。三三そはアダムは窮乏に遭はれ、エハは次なればなり。一四且つアダムは慈はされざりしが、婦は慈はされしかば情になりたりばなり。一五されど彼等に於て、もし謙みて信仰と愛と聖とに降らば、兒を生むことによりて敬はるべし。

人もし見守人の職を得んと身を飾はずは、良き行の類なり、と云ふ言は信なり。二是の故に見守人は必ず書むべきこととなく、一人の妻の夫に

第三章

て、自ら制し、憤み、冗しきに適ひ、旅人を懇にし、能く教へ、<sup>三</sup>葡萄酒を嗜まず、人を鞭たす、されど取つべき利を食らず、寛容争はず、金銀に淡く、<sup>四</sup>良く巴の家の先頭に立ちて、見ゆるを以て罪重を盡して服はせしめざるべからず。<sup>五</sup>されど人もし己が家の先頭に立つことを知りずんば、如何にして神の集會を預かることを得んや。<sup>六</sup>また彼は必ず外の人々にも良き聲あをざるべし、恐らくは懼ぶりに惡魔の裁に陥らん。<sup>七</sup>また彼は必ず外の人々にも良き聲あをざるべからず、恐らくは懲と罪魔の網とに陥らん。<sup>八</sup>事へ人も等しく罪重にして、二言せず、葡萄酒に耽らざらず、取つべき利を食らず、信仰の眞義を淨き良心のうちを保つべきなり。<sup>九</sup>されば先づ此等の事を驗して後に、真むべきところなくば事へしむべし。<sup>一〇</sup>されば先づ人を誦らす、禁面にて、すべての事に信なるべし。<sup>一一</sup>事へ人は一人の妻の夫にして、良く見等と己が家との先頭に立つべきなり。<sup>一二</sup>それは良く事ふる者は、己に良き位を得、且つキリストイエスにある信仰に、頗る大膽なることを「得れば」なり。<sup>一三</sup>われ速に汝の許に來んことを欲みつつ、此等の事を齊き隨ふ。<sup>一四</sup>是れわれれもし遅れなば、神の家にて如何に振舞はざるべからざるかを汝の知らんためなり。此は生ける神の集會にして、眞理の柱と基なり。<sup>一五</sup>されば告白す、敬虔の眞義は大なり、「即ち」神は肉にて顯はれ給へり、靈にて養はせらるれ給へ、天使に見られ給へり、國人のうちに立てられ給へり、世のうちに信ぜられ給へり、榮光のうちに擡げられ給へり。

第四章

されど疑は明かに云ひ給ふ、後の期に及ばば、或る者は惡の靈と惡鬼の故に心に啓き、<sup>一</sup>徳を云ふ者の偽證にて、己が良心を灼かれ、<sup>二</sup>啓ることを燃じ、<sup>三</sup>信にして眞理を察かに知る者のために、感謝をもて受けしめんとて、神の創造し給ひし靈を斷ちて、信仰より離るべし。<sup>四</sup>それは神の創造し給ひし物はずべて良くして、感謝をもて受くるときは、一つとして棄つべきものなればなり。<sup>五</sup>それは神の言また物成によりて築めらるればなり。<sup>六</sup>此等の事を見弟等に授けたば、汝は信仰の言と、汝が恒に飛ぶところの良き歌の「言」とに變はれたる、イエスキリストの良き事へ人たるべし。<sup>七</sup>穢れたる「物語」と老いたる婦の徒なる物語とを避けよ。されど敬虔のために汝自身を訓練せよ。<sup>八</sup>それは體に係はる訓練は僅に益あはれはなり、されど敬虔はずべての事のために益あり、今の生と、將に來んとする「生」の約束を有つなり。<sup>九</sup>此の言は信にして、すべての者の受くべき権あり。<sup>一〇</sup>それはこれがために我等は關ひ、且つ誇らるるなり、是れ我等は生ける神に望をおくが故なり、彼はすべての人、殊に信者の救主にておはします。<sup>一一</sup>此等の事を命じ且つ教へよ。<sup>一二</sup>誰も汝の年若なるをもて輕んずることなからしめよ、反つて實に於て、操舞に於て、靈に於て、靈に於て、信仰に於て、靈に於て、信者の型となれ。<sup>一三</sup>我の來るまで調むことに、驚むること、數ふること心に心を寄せよ。<sup>一四</sup>汝のうちなる賜物を感にする勿れ、是れ長老兼の手を授くことと共に、豫言によりて汝に與へ給ひしところのものなり。<sup>一五</sup>此等の事を沈思せよ、そのうち

にあれ。是れ汝の進歩の、すべての者のうちに顯たらんためなり。一、汝自身のため、また汝ふることのために心を用ゐよ、そのうちに常に居れ。それはかく爲すときは、汝自身を救ひ、また汝に聞く者をも「救ふ」べければなり。

第五章

老人を認むる勿れ、されど「これを」愛むるに父の如くせよ。若き者を兄弟の如くせよ。三、老いたる婦を母の如くせよ。若き婦をわらゆる婦を姉妹の如くせよ。三、老いたる婦を母の如くせよ。若き婦をわらゆる婦を姉妹

家(の者)を敬ひ、かくて双親に酬を爲すことを學ばしめよ、それは是れ神の面前に良し、且つ承けらるる事なればなり。五、されど眞に饑にして獨に居る者は、望を神におきて、夜も目も絶えず、祈願と禱とのうちに居るなり。六、されど逸樂に過ぐす者は、生きたがら死せるなり。七、されば彼等の醒むべきところなるために、此等の事を命ぜよ。八、されど誰かもし己がもつ、殊に家族を顧みずば彼は信仰を呑めるにて、不信者よりも更に悪しき者なり。九、六十年にたらざる者は、船に登せらるること勿らしめよ。(即ち)一人の夫の妻にて、一、良き行をもて、二、若しくは兒を育て、若しくは旅人を持成し、若しくは聖徒等の足を洗ひ、若しくは離れぬる者を助け、若しくはもろの善き行に従ひて、三、善ある者たるべし。二、されど若き者は避けよ、それは彼等もしキリストに背きて、情慾のつりたるるときは、嫁かんと欲すればなり。三、彼等は最初信仰を捨つるが故に、彼を受くるなり。三、また同時に彼等は家々を住

きめりて懶惰を學ぶ、且つ懶惰なるのみならず、尙ほ饑吉にして、餘事にたづきはり、言ふまじき事を語たるなり。二、是の故にわれ若き「聖」に、嫁ぎ、兒を生み、主婦たる事をなし、少しにても敵に照らるべき機を興ふることなからんことを願ふ。五、それは既に成る者は迷ひて、サマナに置き住きたればなり。六、もし誰か信なる「男」或ひは信なる「婦」にして、誓あはば、已これ助けべし、かくて集會は果はきること勿らしめよ。是れ「集會は」實に饑なる者を助けんためなり。

一、七、良く先頭に立つ長老、殊に言と教をもて勞する「長老」は、倍したる敬に値する者たらしめよ。八、それは聖潔は、鞍物を踏む牛に口繩すべからず、と云ひ、また、鋤く者はその賃銀の値(あり)と、云へばなり。九、長老に逆らひての罪は、二或ひは三の證人をもてするにあらざれば、受くる勿れ。三、(それ)ど罪を犯せる者をば、すべての「人」の面前にて辨せ。是れ餘の人々をも懼れしむるためなり。三、われ神また主オスクリストと、選ばれたる天使等との面前にて、汝が個見より離れ、聊かも依怙に頼むて爲すことなくして、此等の事を懺るべきことを嚴に説す。三、手を誰の上にも却に披く勿れ。また他人の罪にも親しく交はる勿れ。汝自身の罪を覆れ。三、この後水を飲む勿れ、されど汝の胃の中へ、即ち汝の腹の中へ、「仰へ」に、少し葡萄酒を用ゐよ。二、或る人の罪は明かにして、先立ちて彼に往く、されど成る者には「罪」後に從ふ。三、良き行も等しく明かなり、然らざる事も隠ること能はず。

第六章

凡そ軀の下にある奴隷は、みな己が主人を、あらゆる敬に値する者と思ふべし、是れ神の名とその敬との間にきざるためなり。二信者なる主人をもつ者は、その兄弟なるの故にこれを輕んぜず、反つて増々これに奴隷たるべし、そは良き行にて扶ける彼等（主人）は、信者にして愛せらるる者なればなり、此等の事を教へ、且つ愛めよ。三誰かもし異なる敬をなし、且つ我等の主イエスキリストの健全なる實、すなはち敬虔に宿ぶ敬に近づかずば、四彼は何をもちて愧ぶり、反つて議論と音ひ靜とに就きて疾に罹れるなり、これに本づきて樂靜胃、惡しき排拒おこり、五また敬虔を利益と思ひて、心を廢らしたる人々の議論と、眞理を離れたる人々の議論と起るなり。此の如き人々より遠ざかれ、六されど是ることを知れる敬虔は大なる益なり。七そは我等は何をも携へて世に入り來らず、何をも携へて出づること能はざることば明かなればなり。八されば或ふる物と、被ふ物とあらば、これにて我等は見れりとすべし。九當まことを願ふ者は、試と絹と感にして善ある様々の懲とに陥らん、此等は人を破壊と滅亡とに沈むるなり。一〇そは金銀を好むは、すべての惡しき事の根なればなり、或る者はこれを慕ひて、信仰より迷ひ去り、かくて多くの罪をもて己自らを刺し通せり。一一されど汝、おあ神の人よ、汝は此等の罪より遁れよ、かくて敬、敬虔、信仰、愛、耐へ、柔和を逞み求めよ。二信仰の良き間をただかへ、永の生を捉へよ、これがために汝は召されたり。また多くの諸人の面前にて良き告白を告げたり。三われすべ

テモテに贈れる使徒パウロの書狀 第壹終り

この物を新かし給ふ神、またホソテオビラトに向ひて良き告白を「もて」證し給ひ、キリストイエスの面前にて汝に命ず、二四汝、我等の主イエスキリストの現はれ給ふときまで、誠を清なく實むべきところなく護れ。二五期到らば爾なる唯一の力、諸王の主、諸主の主はこれを見はし給ふべし。二六彼は獨り不死を俵ちて、延つき難き光に住み給ひ、人は誰も彼を見し者なく、また見ること能はず、永に敬と勢と彼に「あれ」アメン。二七今の世に在る富める者に、自負することなく、また定なき富に望をおくことなく、我等にすべての物を豊に賜ひて、樂ましめ給ふ生ける神に望をおけ、と命ぜよ。二八善を爲すと、良き行に當むこと、快く頌げ與ふこと、親しく交はることば、二九未來のために、以しき禮を彼等は己自らのために著ふるなり、是れ彼等の永の生を捉ふるためなり。三〇おあテモテよ、托せられたる事を獨り、繼れたる虚しき風説と、偽の知識なる反對説とを避けよ。三一或る者これを宣へて信仰を謬れり。連、汝と共に「あれ」アメン。三二パカテヤナのフリキヤの首府なるテモテキヤと、テモテに著き贈れる第壹。



## テモ子に贈れる使徒パウロの書狀 第二

### 第一章

パウロ、キリストイエスに在る<sup>おの</sup>生<sup>いのち</sup>の約束に循ひ、神の意によりてイエスキリの使徒、三<sup>さん</sup>書<sup>しょ</sup>を<sup>を</sup>愛せらるる<sup>を</sup>兒子<sup>こども</sup>マテに<sup>に</sup>贈る。父なる神及び我等の主なるキリストイエスより<sup>より</sup>我、<sup>我</sup>平和<sup>へい</sup>と<sup>と</sup>汝<sup>に</sup>に<sup>に</sup>あれ。

我は夜も日も我が祈願のとき、絶えず汝を憶ひ出づるが故に、淨き良心をもて、先祖等よりこのかたに服事する神に謝しまつる。■是れ汝の涙を憶ひ出でて、我が喜を滿たされんがために、汝を見んことを待ち望み、■また汝のうちに在る偽なき信仰を憶ひ起せばなり。此の「信仰」は先づ汝の祖母ロイスに、また汝の母ユケに宿りたり、されば汝のうちに「ある」ことを確く信す。■この故に我は我が手を按くことによりて、汝に「賜はりし」ところの神の賜物を、汝の再び赦にせんことを憶ふ。■それは神は我等に聽する<sup>を</sup>聲<sup>こゑ</sup>を興<sup>た</sup>げ給ひしにあらず、力の、また聲の、また聲の「聲」なればなり。■是の故に汝は我等の主の聲を聴とすべからず、また彼の凶人なる我をも「無づる」勿れ。されど神の力に循ひて、福音のため「我」と共に<sup>と</sup>勞苦<sup>らうく</sup>を<sup>を</sup>受<sup>う</sup>けよ。■汝は我等を救ひ給ひ、且つ理なる<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>もて「我等を」召し給ひたり。我等の行に<sup>に</sup>循<sup>したが</sup>ひてにおらず、されど己が肩と<sup>と</sup>連<sup>つ</sup>ねとに<sup>に</sup>循<sup>したが</sup>ひ給ひてなり、此は水の時の前に、

キリストイエスのうちに我等に與へ給ひしことなるなり。一〇 されど全福音によりて死を亡ぼし、生と不朽を昭かにし給ひし、我等の救主イエスキリストの現はれ給ひしによりて願はきれたり。一 これがために我は立てられたる國人の宣教師、また使徒、また教師なり。二 此の故に我は此等の苦を憂くるなり、されど我は「これを」恥とせず、我は我が信する者の知り、且つ我の托せられたるものを、かの日に至るまで擔ふことを確く信ずればなり。三 汝はキリストイエスに在る信仰と愛とのうちに、我に聞きしところの健全なる福音の模範を採て。四 「また汝に」托せられたる良きものをば、我等のうちに住み給ふ聖靈によりて御れ。五 汝は「ヤシ」に在る者か我より離れ去りて、そのうちに「フクロ」と「ルモ」のあつてを知ら。六 主は本シキロの家に豎を興へ給ふらん。それは屢々彼は我を築ならしめ且つ我が繼を耻とせず、五 反つてその口にて來りしとき、勉勵みて我を築め、かくて見出ださればなり。六 主はかの日に於て、彼をして主の前に懸を得しめ給ふらん。また彼が五つにて我に事へしことはみな、汝の能く知るところなり。

第二章

是の故に汝、我が兒と、キリストイエスのうちに在る運にて力づけられよ。二 また多くの證人によりて、我に聞きしところの事は、これを他の人にも教ふるに足るべき、信する人々に托せよ。三 是の故に汝、イエスキリストの良き兵卒として勞苦を受けよ。四 兵卒を勤むる者にして、所帯の事に漸まるる者があることなし。是れ已を養はる

者に喜ばれんがためなり。五 人もし闘ふも、法に合ひて闘はずば冠を得ず。六 勞する農夫、必ず先づ餌の頰を享けざるべからず。七 我が云ふ事を思へ。八 是はすべての事に於て、主は謙を汝に與へ給ふべければなり。九 我が福音に循ひて「ダビデ」の種の死人のうちより起され給ひし、イエスキリストを憐ひ出でよ。九 これがためにわれは惡漢として懸がるに至るまで勞苦を受けたり。されど神の言は驗がれず。一〇 此のゆへに我は選ばれたる者のゆへに、すべての事を耐へ忍ぶ。是れ彼等にも永の榮光と共に、キリストイエスのうちにある救を得しめんためなり。二 「それ」言は信「なり」。それは我等も「彼」と同じに死にしなければ、我等も「彼」と同じに生くべし、三 我等も「耐へ」忍ばば、我等も同じに王たるべし、もし吾まば、彼も我等を吞み給ふべければなり。三 我等もし信ならずとも、彼は恒に信にておはします、彼は已自らを吞み給ふこと能はず。

一 汝、主の前にて懸に懸しつゝ「彼等に」此等の事を憶ひ起して「かの」益するところなく、聞く者を滅に至らしむる口論をなすことなからしめよ。二 汝 眞理の言を眞直に説ひ、罪つることなき働人として、神に是とせられて已自らを厭ふことを勉めよ。三 されば續れたる虚しき風説より遠ざかれ。それは彼等は皆々不處に進むべし、且つその言は撒旦の如く腐れひらがるべければなり。四 マナヨとヒシトはそのうちに在り。五 彼等は眞理に就きて譯れる者にて、謎を通きたりと云ひ、かくて成る者の信仰を倒したり。九 されど神の礎は堅

く立ちて「これに」かく仰あり、主は己のものなる者を知り給ふ、またすべてキリストの名を稱ふる者を、不義より離れしめ給ふ。三、きれと大なる家には、常に金と銀との器あるのみならず、尙ほ木と土との「器」も「ありて」或る物は食きに、また或る物は睡きに「用ゐらるなり」三、誰かもし己目を淨めて此等より「離れ」なば、實きための器たるべし。「即ち聖められたる、主に對して有用なる、すべての善き行のため備へられたるものたるべし」。

三、されど「汝」年若なる者の慾望を遁れよ。かくて淨き心にて主を呼ぶ者と共に、義信仰、愛、平和を追い求めよ。三、愚にして無節制なる論は争を生ずることを知りて、これを避けよ。三、また主の御機は必ず争ふべからず、反つてすべての者に對して憐しけれ、加へ、教へ、忍ぶことをし、三、逆らふ者を柔和をもて懲らしむべし。神或ひは彼等に能ひ改を興へ給ひて、眞理を認むるに至らしめ給はん。三、かくて彼等は彼の意を「爲す」ために、生捕られたるかの聖徒の類より離むるに至らん。

第三章

されど此の事を知れ、末の日には困難の期の押し迫らんことを。二、そは人々己を庇ふ者、金銀を好む者、高言する者、傲慢なる者、闘争者、双程に服はさる者、恩を知らざる者、聖からざる者、三、無情なる者、執念深き者、讒る者、探なき者、殘割なる者、善を好まぬ者、四、友を賣る者、笑なる者、慳心する者、神よりも更に快樂を好む者たるべければなり。五、彼等は彼等の姿あれども、その力を奪む者なり、されば此等の者を避

けよ。六、そは家々に入り來りて、愚なる婦を據にする者は此等のうち者なればなり、「かかる婦は」罪を積み重ねられ、幾々の懲りに引き往かれ、十恒に墮べども、決して眞理の知識に來ること能はざる者なり。八、されば此等の者はヤソノとヤソフのモラセに逆らひし如く、その如く眞理に逆らひ、思を腐らし、信仰に就きては棄てられたる人々なり。九、されど彼等は此の上に進むこととあらざるべし。そはかの二人の愚なることも明かにし如く、彼等の愚なる事はすべての者に明かなるべければなり。一〇、汝は我が教に、品行に、志望に、信仰に、愛に、耐ふること恒に勉むべし、「（また）ソノテオクにて、イヨニオムにて、ルスマラにて、我がために發りし如きと、受けし善とに恒に勉むべし」。かく我は如何なる追善をも耐へしかば、主はすべてより我を救ひ給へり。二、さればすべてキリストイエスに在りて、敬虔に生きんことを欲する者は追善せらるべし。三、されど惡しき人と拮く者とは、「他を」惡はしました惡はされつ幾増々惡に進むべし。四、されど汝は眞びて保護せられたる善のうちに居れ、汝はこれを誰より學びしかを知らばなり。五、また汝は聖徒の「とき」より、聖なる汝はキリストイエスに在る信仰によりて、教に至りしむるために、汝を解かしむることを得るものなるを知れり。六、すべて罪者は神の靈感にて成れるものなれば、敬のため、神の自認のため、矯正のため、善に在る惡のために益あり。七、是れ神の人の、すべて善き行を爲し遂ぐるために適したる者たらんためなり。

第四章

是の故にわれ神の、また主イエスキリストの面前、即ちその現とそれの嗣とに

す、三次、言を宣へ、機よきにも、機あしきにも、勵みせよ、あらゆる忍と教とをもて  
結せよ。認めよ。三、それは人々健全なる教に堪へず、反つて己が教に預ひ、これを聞く  
ことをもどかしかりて、己がために教師を増し加へんとする期あるべければなり。四、また彼等  
は廢理より耳をそむけ、かくて能なる物語に迷ひ往かん。五、されど汝はすべての事に素直なれ、  
勞苦を受けよ、福音宣傳者の行を爲し、汝の奉事を満たせ。六、それはわれ既に「併へ物として」  
血を流し、我が去るの期近づけばなり。七、我は良き圖をただかひ、逆理をつし、信仰を棄れ  
り。八、餘は、義の冠わがために備へあり、かの日に於て義しき裁き人なる主は、これを我に酬  
い給ふべし。また奇に我のみならず、彼の現を懸ふるすべての者にも「酬い給ふべし」。

九、地めて汝に我が許に來れ。一〇、それはテマス今の世を愛し、我を見捨ててテサロニケに往け  
り。クレメンテはカラチヤに、テトスはタルマヤに「往き」、一、獨りルカのみと共にあ  
り。アルコを汝自身と共に連れ來れ、それは奉事のために我に有用なればなり。二、またわれテ  
キヨをエペソに使はせり。三、「汝來るとき、我のトロアにて、カルボの許に遣し置きたる  
上衣を携へ來れ、また小巻物を、殊にその羊皮紙なるを携へよ」。四、銅器なるアレキサンド  
ロ、我に多くの聖しき事を表はしたり、主は彼の行に預ひてこれに酬い給ふらん。五、汝も彼

につきて爾れ、それは彼は我等の言に堪え逆らひたればなり。六、我が故初の辨明のとき、我と  
同に立ちし者なく、されどみな我を見捨てたり。彼等に罪の跡せられざらんことを。一、され  
ど主は我と共に立ち給ひて、我を力づけ給へり。是れ我によりて宣教の満たされ、すべての國  
人のこれを見聞かんと欲なり。かくて我は獅子の口より授はれたり。七、また主は我を惡しきお  
のの行より授ひて、天なる彼の國に救ひ入れ給ふべし。世々の世々に至るまで榮光彼に「あ  
れ、アメン」。

一、ユリアスカとアキラと本ホシワの家に挨拶せよ。三、エラストはエペソに留まれり。  
また病みければトロピモをミレトスに遣せり。二、勉めて冬の前に來れ。ユプロとアテスとり  
ノスとクラウデアとすべての兄弟等、汝に挨拶す。三、主イエスキリスト汝の靈と共に「おほ  
せ。主、汝等のうちに「あれ、アメン」。

は故初の頂守人、テモテに書き附れる第二。

テモテに贈れる使徒パウロの書状 第二終り

## ネトスに贈れる使徒パウロの書状

### 第一章 パウロ、神の奴僕、またイエスキリストの使徒、諸神の選民の信仰と、敬虔

に循ふ真理の知識とに循ひて、三條り給ふこと能はざる神の、永の時の前に

約束し給ひ、三定まれる期に、その言を真教をもて顯はし給ひたる永の生いのちの望のために、我は

これ「ユダヤ教」を、神なる我等の救主の命に循ひて委ねられたるなり。且「諸族」を「共通」の信

仰に循ひて「我が」眞實なる兒子トスに贈る。父なる神及び我等の救主なるイエスキリスト

より其啓、平和「汝にあれ」。

我が汝をクレテに遣し置きたる故は、汝をして純たる事を直らせしめ、且つ我が汝に指図

せし如く、市々に長老を立てしめんと欲したるなり。\*雖どもし憤むべきところなく、一人の妻のみに

して、その兒等も信仰を保ちて、放蕩或ひは不服従の罪を犯すことなき者ならば良し。\*そ

は見守人は神の家等なれば、必ず其わびべきところなき者たばざるべからず、自儘ならず、怒り

易からず、葡萄酒を嗜まず、人を撃たず、卑つべき利を貪らず、又また人々を怒らし、善を

好み、謹み、善し、聖く、度を過ぐさず、\*汝に循ひて信の言を保つべきなり。是れ健全な

る敬をもて「人」を「愛せ、且つ云ひ逆らふ者を起すためなり。」\*そは多くの遺しき物語をな

不服従なる者、また人の心を惑はす者あり、殊に割禮の者のうちに(多ければなり。一) 彼等をして必ず口を封がしめざるべからず。彼等は耻づべき利のために、必ず教ふべからざる事を教へて、人の一家を全く倒す者なり。三 彼等自身の豫言者のうち戒る者いへり、クレテ人は常に偽をいふ者、惡しき歌、懶惰の冒険なり。三 此の證は眞なり。此の如くに假しく彼等を組せ。是れ信仰に在りて彼等の健全ならんため、一 眞理を棄てて、エダヤ人の従なる物語と人の策とに、彼等の心を寄すことなからしめんと欲す。二 淨き者にはすべての物淨し。されど汚れたる者と不信者とは、一 つとして淨きものなし。されどその思ふ良心もともに朽るるなり。二 六 彼等は神を知ると告白すれども、その行にては否む。(彼等は惡むべき者、また願はざる者にして、善き行のおののために棄てられたる者なり)。

### 第二章

されど汝は健全なる教に遵ひたる事を語たれ。二 即ち老いたる人を、酒を飲まざる者、莊重なる者、誰ある者、僭仰に、愛に、耐へ忍に健全なる者たらしめ、三 老いたる婦を等しく、聖き者に似合ひたる身持をもて、人を讒らず、甚く葡萄酒に耽溺たらず、良き事を教ふる者たらしめよ。四 是れ若き婦を、彼等の欺練して、夫を惡にする者、兒を懇にする者たらしめ、五 謹み、潔く、家事を理め、善くして己が夫に服ふ者たらしめんと欲す。是れ神の旨の冒されざらんためなり。六 若き人を等しく養めて謹ましめ、すべての事に就きて、汝自身をもて良き行の觀を示し、教をなすに如なきこと、莊重、誠實

八 健全にして賢むべきところなき言をもてせよ。是れ道らふ者の、汝等に就きて惡を云ふことを得ずして、耻ぢしめんためなり。九 奴僕をば、己が罪人に服ひて、すべての事に就き、云ひ違らはす、一〇 物を盗まず反て善を盡したる僭仰を表はさしめよ。是れ剛なる汝等の救主の教を、すべての事に於て飾らんためなり。

一 是れすべての人に教を濟らす神の恵は顯はれ、二 不慮と、世につける態を否みて、謹ましく、また義しく、また敬虔に、今の世に我等の生きたため我等を惡らしめ給ひ、三 願なる望、即ち大なる福にして、我等の救主なるイエスキリストの、榮光の顯を待たしめ給へばなり。四 彼は己自らを我等のために與へ給へり。是れ我等をすべての不法より贖ひ給はんと欲し、且つ特に己自らのために民を淨めて、良き行の熱心者たらしめ給はんと欲す。五 此等の事をすべての命令をもて語たり、且つ獎め、且つ糺せ。誰も汝を離んずること勿らしめよ。〔汝〕彼等を長と權とに服せしめ、願はしめ、善き行のおのにおのに如あらしむることを愾ひ起せ。三 誰も冒すこと、争ふことなからしめ、寛容にしてすべての人に對して、あらゆる柔和を表はさしめよ。三 是れ我等も待て思はる者、願はざる者、迷へる者、さまざまの怒と性燥とに奴僕たりし者、惡意と嫉妬のうちに過ぐし者、憤むべき者、五に憎みあへる者なりなり。四 されど我等の神の慈愛と仁愛との顯はれしとき、五 我等の爲し義の行にてあらす、されど我等を救ひ給ひし彼の聖に循ひ、聖靈の更生と、更新の法とに

### 第三章

一 是れすべての人に教を濟らす神の恵は顯はれ、二 不慮と、世につける態を否みて、謹ましく、また義しく、また敬虔に、今の世に我等の生きたため我等を惡らしめ給ひ、三 願なる望、即ち大なる福にして、我等の救主なるイエスキリストの、榮光の顯を待たしめ給へばなり。四 彼は己自らを我等のために與へ給へり。是れ我等をすべての不法より贖ひ給はんと欲し、且つ特に己自らのために民を淨めて、良き行の熱心者たらしめ給はんと欲す。五 此等の事をすべての命令をもて語たり、且つ獎め、且つ糺せ。誰も汝を離んずること勿らしめよ。〔汝〕彼等を長と權とに服せしめ、願はしめ、善き行のおのにおのに如あらしむることを愾ひ起せ。三 誰も冒すこと、争ふことなからしめ、寛容にしてすべての人に對して、あらゆる柔和を表はさしめよ。三 是れ我等も待て思はる者、願はざる者、迷へる者、さまざまの怒と性燥とに奴僕たりし者、惡意と嫉妬のうちに過ぐし者、憤むべき者、五に憎みあへる者なりなり。四 されど我等の神の慈愛と仁愛との顯はれしとき、五 我等の爲し義の行にてあらす、されど我等を救ひ給ひし彼の聖に循ひ、聖靈の更生と、更新の法とに

よりてなり。六是れ我等の教主なるイエスキリストによりて、懇に我等の上に注意せしむるなり。七是れ我等は彼の恵にて養とせられ、永の生の望に頼りて世嗣とならんためなり。八「それ」言は信なり。さればわれ此等の事に就きて、汝に確く保證せんことを願ふ。是れ神を信したる人々の、良き行の先頭に立たんことを心掛くるためなり。此等の事は人に良く、且つ益ある事なり。九されど愚なる論と、系圖と、諍と、掟につきての争とより逃さかれ。それは此等は益なく、且つ徒なるものなればなり。一〇異端を唱ふる人は、一たびまた二たび離れたる後に「これを」避けよ。一「それは」かくの如き者は邪にして、自己を罪なひつ「何ほ」罪を犯すことを汝知ればなり。

二われアルテマヌ或はテキモを汝の許に遣はさんとき、勉めて我が許にニコポリスで來れ、そはわれ彼處にて冬繼せんと決したればなり。三 提學者なるセナスとアホロとを勉めて送り遣せ。是れ彼等に欠ることなからしめんためなり。四 かくて我等をして押し追はる必要のために、良き行の先頭に立つことを學ばしめよ、是れ彼等の實を結ばざることなからんためなり。五 我と共にあるすべての者、汝に挨拶す。信仰に在りて我等を懇にする者に挨拶せよ。其汝等すべての者のうちに「あれ」アメン。

クレテ人の集會の、指名せられたる最初の見守人なるテトスに、アケドニヤのニコポリスより書き附れり。

テトスに贈れる使徒パウロの書翰 終り

## ピレモンに贈れる使徒パウロの書状

「パウロ、キリストイエスの囚人、及び兄弟なるテモテ（譯名を）我等の愛せらるる者にして同労者なるピレモン、ニまた我等の愛せらるる姉妹アピヤ、また職友なるアルキボ、また汝の家に住る執管に「贈る」。三 我等の父なる神及びキリストより甚と平和と汝等に「おれ」。

四 我は恒に我が職のうち汝を憐ひ用で、我が神に感謝しつる。五（そは）主イエスに對し、またすべての理徒等のために、汝が有する愛と信仰とを聞けばなり。六 是れ汝の信仰の親しき交は、汝等のうちにあるすべての善き事の善かなる知識のうちに、キリストイエスのため有効となりんためなり。七 是れ汝の愛のゆへに、我等は大なる喜と榮とを得たればなり。八は兄弟よ、聖徒等の情 汝によりて疾にせられたればなり。

九 かるが故にわれキリストに在りて、差し迫れることを明かに汝に書付くことを得ればども、カ愛のゆへに驚るわれ汝に乞ふ、しかくの如くパウロは年老い、且つ今もイエスキリストの囚人にて、四〇 我が標のうちにて生かし、我が見なるオホソモに就きて、われ汝に乞ふ。二 彼等ては汝に益なき者なりしが、今は汝にも我にも益ある者なり、われ彼を「汝」に送り



歸さん。二 されば汝、彼を「此は我が憐なり」を受けよ。三 われ彼を我が許に留め置きて、汝に代りて福音の繚（ま）のうちに在る我に奉へしめん（と）と願ひたりしが、四 汝の理解なしは何をも爲すことを欲せず。是れ汝の善を爲すに止を得ずとしてにあらず、任意に預ひてせしめん（と）なり。五 彼が一時の間「汝を」離れたるは、恐らくは此のゆへなりしならん、即ち汝は彼を共に保たんと欲せしならん。六 もはや奴僕としてにあらず、奴僕に勝る者、愛せらるる兄弟（と）に我にとりて「主」としてなり。されば汝のためには、肉に於ても主に於ても如何に勝るべき。七 是の故に汝もし我と親しき交わらば、彼を我として受けよ。八 されど彼もし何ぞ汝に不義せし事、或ひは負債あらば、我にこれを負はせよ。九 われババロ我が手にて受けり、われ償ふべし。是れ汝は汝自身をさへ、我に翻して負へることを、我の汝に云ふことなかりしためなり。一〇 然り兄弟よ、われ主に在りて汝より益せられんことを願ふ。主に在りて我が情を疾にせよ。二 われ汝の服ふことを確く信じて汝に誓ひ、我が云ふところに勝りて汝の爲さんことを知ればなり。三 尙ほまた我がために棺を備へよ、そはわれ汝等の隣によりて、我は汝等に與へられんことを望めばなり。四 キリストイエスに在りて囚の侶なるエバラス、汝に挨拶す。五 我が同業者なる「アルコ、アリスタルコ、テマス、ルカ」も汝に挨拶す。六 我等の主イエスキリストの恵、汝等の靈と共に「あれ」。アメン。

家僕オネシモに托して、ロヤトリエシモンに書き贈れり。

エシモンに贈れる使徒パウロの書状 終り

# ヘブル人に贈れる使徒パウロの書狀

## 第一章

神むかしは多くの區分をなし、また多くの方法をもて、先祖等に豫言者等に

於て語たり給ひしが、此の末の目には子に於て我等に語たり給へり。三神は

これを立てて、すべてのもの世嗣となし給ひ、また彼によりて世をも造り給へり。三

彼の榮光の輝、またその本質そのまの形におはして、その方の前にてすべての物を保ち

給ひ、己自らによりて我等の罪の淨をなし、高き處におはす威光の右手に坐し給へり。四かく

の如く天使等より勝れる者となり給ひたれば、その嗣き給ひし名も彼等よりは最優れ給へり。五

されば彼は天使等のうちの誰に對して、曾て「汝は我が子なり、われ今日汝を生めり」と曰ひ、

かくて復た「我は彼のために父たるべく、彼は我がために子たるべし」と「曰ひし」や。六且

つ復たその長子を世界に彼の連れ入れ給ふとき「神の使等はこれに平伏すべし」と云ひ給へり。

七また彼は天使等に就きて云ひ給ふ、「彼はその天使等を風となし、その仕う人をは水の類と

「なし」給ふべしと子に就きては、「二神よ、汝の位は世々にまで至り、汝の國の汝は恒な

る故「なり」。八汝は義を愛して不法をば憎み給ふ、此のゆへに神、汝の神は汝の側に應れる歡

のエンライオンを汝に注ぎ給へり。」九また「主よ、汝は初に地を築き給へり、また天も汝の手

の行なり。二彼等は亡びん、されど汝は恒に存へ給ふ。彼等はみな衣の如く腐り去るべく、  
 三また汝は彼等を被服の如く巻き給ふべし。また彼等は變らん、されど汝は彼にておはしま  
 す。また汝の年は終ることなし。三されど彼は曾て天使等のうちの誰のために、汝の敵を汝  
 の足の足裏に掛つるまで、我が右手に坐せよ」と謂ひ給ひしや。一四彼等はみな將に汝を嗣が  
 んとする者のゆへに、秦軍のため使はされて作ふる靈にあらずや。

第二章

るばかり心を寄せざるべからず。二もし天使等にによりて語たられたる言の堅  
 りせられ、且つ背と胸はきること、おのこの正しき報を受けたらんには、三かく大なる救を  
 降閑にして、我等争で通るべけんや。此は初に主によりて語たられ、聞きし人々より我等のた  
 めに堅うせられ。四神が徴と、奇跡と、さまざまの力ある行と、彼の靈に循ひて聖業を頌ち興  
 へ給ふこととをもて證し給ふところなり。

五そは「神は我等が語たるどころの將に來らんとする世界を、天使等に服はしめ給はざり  
 しが故なり。六されば或る處に或る者、嚴に證して云ひけるは、人は何ぞや、汝これを憶ひ出  
 しが故なり。或ひは人の手は何ぞや、汝のこれを顧み給ふとは。七汝は天使等より少しくこ  
 で給ふとは。或ひは人の手は何ぞや、汝のこれを顧み給ふとは。七汝は天使等より少しくこ  
 れを卑らし、榮光と敬とをこれに冠らしめ、且つ汝の手の行の上にこれを振多給ひて、八すべ  
 ての物をその足の下に服はしめ給へり。そはすべての物を彼に服はしめ給ひたれば、一つ

としてこれに服はで残されしものなればたり。されど我等は今何ほすべての物の、彼に服ひ  
 しを視す。九されど我等は天使より少しく卑くせられ給ひし者、其死の害を受け給ひしにより  
 て、榮光と敬とを冠りせられ給ひしイエスを觀る。是れ彼は神の選にて、すべての人に代り  
 て死を味ひ給はんだためなりなり。一〇そは多くの字等を榮光に輝き入らんとて、彼等の救  
 護を害によりて空うせしめ給ふことは、すべての物とこれがために「存じ」またすべての物とこれ  
 によりて「存する」ところの、彼に適ひたることなればなり。二そは聖むるところの御も、  
 聖らるる彼等も、すべて本つところは「なればなり。このゆへに彼は彼等を見御と嘆ぶこ  
 とを耻とし給はず、三云ひ給ひけるは「われ汝の名を我が兄弟等に知らしむべし、集會の儀  
 中にてわれ汝を講義すべし。かくて復た「云ひ給ふ、「われ彼に頼まん。三また復ひ「云ひ  
 給ふ、「且つ我と神の我に與へ給ひし幼童等と。四是の故に幼童等は肉と血とに親しく交  
 はれば、等しく彼も同じきものを共に享け給ひしなり。最れ死によりて彼は死の勢を有つ者、  
 即ち惡魔を亡ぼし、五且つその生けるすべての間情をもて奴僕たりし此等の者を釋き放ち給  
 はんためなりしなり。六そは先に彼は天使等を扶け給はず、されどアラムの種を扶け給  
 へばなり。七そは故に彼はすべての事に兄弟等に等しかるべかりしなり。是れ民の罪を斷は  
 んために神に關はる事につき、潔淨く且つ價なる祭司長となり給はんだためなりしなり。八そ  
 は彼は自ら試みられて苦を受け給ひたれば、試みらるる者を助くることを離くし給へばなり。

第三章

それ故に聖なる兄弟、天なる召を共に享けたる者よ、我等の告白の使徒にし

て、祭司長なるキリストイエスをつらつら思へ。二彼はモラゼが彼(神)の

家々に「僮なりし」如く、己を立て給ひし者に僮なる者におはしき。三そは此の者はモラゼよ

り勝れる榮光に僮する者とせられ給ひたればなり、恰も家よりはこれを遣れる者の勝りて喪

が如し。四そはずて家人に遣らるればなり。されどすべての物を遣り給ひし者は神にお

はせばなり。五またモラゼは罪たらんとする罪の證のために、彼の全家に従僕として僮なる者

なりき。六されどキリストは子として、彼の全家を「寄り給へり」。我等もし親の訥と大膽とを

終まで堅く保たば、我等は彼の家なり。七かゝるが故に聖なる靈の云ひ給ふ如く、「今日もし彼の

聲を聞かば、大荒野に於ける賦の日に怒を惹きしときの如く、汝等の心を頭にする勿れ。カそ

こにて汝等の先祖は我を賦み、我を働したり。かくて我が行を見しこと四十年。二かかるが

故に我はかの代に翻して怒り、且ついへり、彼等は常に心迷へり、且つ彼等は我が道を知らざ

りき。一されば我は我が怒をもて遷へり、假令彼等は我が体に入り来んとするとも。二

視よ、兄弟よ、恐らくは生ける神より離れんとする不信仰の惡しき心は、汝等の或る者のうち

にあるならん。三されど汝等のうち誰も罪の法にて頭にせらるることなからんために、今日

と叫ぶ(目)のうちには自らを獎めよ。四我等もし初の確信を以て堅く保たば、キリ

ストを共に享くる者となれるなり。五云へることあり、汝等もし今日彼の聲を聞かば、怒を

第四章

是の故に我等懼るべし、彼の体に入り来るべき約束は措かるれども、恐るく

は汝等のうちこれに及ばざる者ありんと思はるればなり。二そは我等も彼等

の如く福音を宣傳へられたればなり。されど(彼等は)聞きし言に俯仰を和せざりしかば、そ

の聞ける言も彼等を益せざりき。三そは我等俯仰せし者は体に入り来ればなり、彼の罪ひ給へ

るが如し、我は我が怒をもて聲ひし如く、假令彼等は我が体に入り来んとするとも。されど

世の例より(既に)行は成れるなり。四そは或る處に第七(目)に就きてかく翻ひたればなり、

「即ち神は第七の目に彼の行のすてより体ひ給へり。五かくて復た同じ處に(假令彼等は我

が体に入り来んとするとも)と(あり)。六是の故に或る者のためには、これに入り来るべく

遣れるなり。されど(我は)福音を宣傳へられたる人々は、願はざるによりて入り来ることを得ざ

りき。七復た彼は久しき時の後、タビデをもて「今日」と或る日を限りて、(靈に)翻ひしが如

「今日もし彼の聲を聞かば、汝等の心を頭にす勿れ」と云ひ給へり。八そはオエスもじ彼等を休ましめしならば、彼〔神〕はそのお他の日に就きて語たり給ふところなからんべければなり。九されば安息は神の民に遣れるなり。一〇そは彼の休に入り来りし者は、神が己の〔行〕より〔休み給ひし〕如く、彼もその行より休みたればなり。一一是の故に我等は休に入り来らんとことを慥むべし、是れ誰も不順の同じき模範に陥ることなからんためなり。二そは神の言は生き且つ效あらばなり、即ちすべて兩派の御よりも鏡く、魂と雲〔また〕關節と骨髄とを貰きて割き、心の念と聖とを見分ければなり。三また創造せられたる物にして、彼の面前に顯はれざるものはあることなし。されば我等の係はれる者なる彼の目には、すべての物標にして被ふこと惟はず。

一四是の故に我等は天を通り給ひし大なる祭司長、神の子なるオエスを有すれば、我等その告白を堅く捉ふべきなり。一五そは我等は我等の弱に對して、同情すること能はざる祭司長をもつにあらざり、されど彼は罪のほかはずべての事に於て、我等と等しく試みられ給ひたればなり。一六是の故に我等は大膽に蕙の位に進み来るべし、是れ感を受けて、機に合ふ助となる事を我等の見出ださんためなり。

第五章

そはずべて人のうちより探られたる祭司長は、人に代りて罪のために、世へ物を犠牲をも獻げんとて、神に對する事に任ぜらるればなり。二彼は己も

驕に纏はるるが故に、無知なる者、また迷へる者を思ひ遣ふことを得るなり。三此のゆへに彼は民に就きての如く、その如く己自らに就きても、罪のために赦げざるを得ず。四また誰もこの實き己自らのために取るにあらざり、されど彼はアロンの如くに神より召されたるなり。五かくの如くキリストも己自らを強めて、祭司長となり給ひしにあらざり、されど彼に對して一汝は我が子なり、われ今日汝を生めり」と語たり給ひし者〔によりてなり〕。六また他〔の處〕に一汝はムルキゼクの班に循ひて永に彼の云ひ給ふが如し。七彼はその肉の目に於て、己を死より救ふことを得給ふ者に、強き叫と涙とをもて、祈禱をも懇願をも獻げ、その恭によりて聞き入れられ給ひたり。八彼は子におはせども、受けしところの苦より服ふことを學び、九且つ完うせられ給ひて、すべて彼に服ふ者のために、永の救の原となり、一〇神よりムルキゼクの班に循ふ祭司長なりと稱へられ給ひき。二彼に就きて、我等には云ふべき多くの言あらばども、汝等聞くことに能くならんれば釋き難し。三そは汝等は時を纏たれば、教誨たるべき者なるに、復た神の言の小學の初を飲へらるの要あらばなり、即ち堅き食物なりで、乳を飲する者となれり。三そはずべて乳の初を享くる者は、蕙の首に纏せざる者なればなり、そは小兒なればなり。一四されど堅き食物は、逆例良きをも惡しきをも辨ふるやう、辨せられたる官能を有する者なる成人の〔用ふる〕ものなり。

第六章 かるが故に我等はキリストの初を差しおきて、完全に向ひて進むべし、

【即ち】死の行の悔ひ故と、神に向ひての信仰、こゝまでいまだまざるアブラマの敬と、手を抜くことと、死人の體と、永の義との體を再び置く勿れ。三乃ち神もし許し給はば我等を救ふべし。四そは一たび照らされ、天なる賜物を味ひ、聖靈の頌を享くる者となり。五且つ神の良き詞と、將に來らんとする世の力ある行とを味ひて、六「後」に墮落する者は、神の子を己らのために十字架につけ、且つこれを曝すが故に、復た新に悔ひ致に至らしむること能はざればなり。七そは地しほばその上に來る雨を飲み、耕す者のために有用なる野菜を産せざれば、神より祝願の頌を受けん。八されど菜と薔とを出ださば、棄てられ、且つ蛆に近し、その終は堪へるにあり。九されど愛せらるる者と、我等その如く語られたれども、汝等に就きては更に善き律、即ち赦に保るることある」を確く信ず。一〇そは神は汝等の行、即ち汝等が前に「聖徒等に事へ今も」事へて彼の名のために我はずとるの、愛の勞を忘れ給ふ不義なる者に、おはさねばなり。一「されど我等は汝等のおの終まで、望の保證のために同じ勸勉を蒙はし、三怠り者となることなく、信仰と忍によりて、約束を嗣ぐ人々に倣はんと欲す。三

それは神がアブラマに約束し給ひしとき、指して誓ふべき「己」より大なる者なきが故に、「己自らを指し誓ひて、「己云ひ給へばなり」「われ汝に度量みて汝を恵まん、且つ種してわれ汝を殖さん」。五乃ち彼はその如く忍びたれば、約束のものを得たり。六そは如何にも人は「己」より大なる者を指して誓へばなり。かくて誓は彼等に對して、すべての評議を終らしむる證據

第七章

となるなり。七 これをもて神は尙ほ勝りて約束を嗣ぐ者に對して、その旨の變りざること示さんことを欲して「これに」誓を挿し入れ給ひたり。八是れ神の憐ること能はざる、二つもの變ることなき事柄によりて、道れ場に走れる我等の、その前に置かれたる望を捉ふべく、強き機を得んたためなり。九我等は此の「望」を魂の鎖として有するなり。安全なるもの、また確なるものにして、深く樹の内に入るなり。一〇そこに我等のために、イエスは前驅者として入り來り、マルキセデクの班に預ひて、永に祭司長となり給へり。

そはマルキセデク、サレムの王、至高き神の祭司なる此の者は、王等を切り殺して歸り來りしアブラマに出で會ひて、彼を祝願せる者なればなり。三「そのとき」アブラマはすべての物より十分の一を彼に願うたり。これを譯すれば、第一に義の玉、また次にサレムの王、即ち平和の王なり。三「彼は父なく、母なく、采園なく、日の初なく、生の終もなし、されど神の子に等しくして、限なく存ぶる祭司なり。四されば此の者の如何に大なるかを看よ、先祖アブラマを、その分捕物のうちより十分の一を彼に與へたり。五また此の子等のうちの祭司職を受けたる者は、按に預ひて民にアブラマの慶より出で來れる者なれども、非即ち兄弟等より十分の一を取ることと命せらる。六されど彼等の采園にあらざるは、アブラマより十分の一を取り、且つ約束をもてる者を祝願せり。七されとすべての評議より離れて、劣れる者は勝れる者より祝願せらるべきなり。八且つ此處にては死

する人、十分の一を取れど、彼處にては「彼は生く」と隠せらるる者これを取る。九、されば一言にていは、十分の一を取る者なるしも、アハラムによりて十分の一を納めたるなり。一〇、そはメルキセデクの、彼「アハラム」に出で會ひしとき、彼は尙ほその父の職にありたればなり。二、境の故に完成もしよの系なる祭司職によりてありしならば、非そはこれに本づきて民は掟を受けられたればなり。非尙ほ何ぞアハラムの班に備ひて稱へられざる。メルキセデクの班に備ふ、他の祭司の起ることを要せんや。三、そは祭司職の易はるときは、必ず掟の易はることも發るべければなり。三、此等の事は祭壇に侍したる者なき、他の族に屬する者につきて云はるなり。一四、そは我等の主はエズマリ興り給ひしことは明かにして、モラセはその族のために、祭司職に就きて何事をも語たりしことなればなり。一五、またもしメルキセデクに等しき他の祭司の起らば尙ほ勝りて明かなり。一六、彼は肉なる誠の掟に備ひてにあらず、されど朽ちざる生の力に備ひて現はれ給ひしなり。一七、そは「汝はメルキセデクの班に備ひて、永に祭司なり」と彼は隠し給へばなり。一八、そは前の誠はその弱と益なきとによりて、傍寄せられたればなり。一九、そは掟は何をも完うせしことなし。されど更に勝れる衆の稱し加へ、それによりて我等は神に近づけばなり。二〇、また「祭司は」みな善ふことより離れることなし。そは善ふことなくして、祭司となる者なればなり。二一、されば「主は誓ひ給へり、且つ悔ひ給はざるべし」。一、汝はメルキセデクの班に備ひて永に祭司なり」と、彼のために云ひ給ひし者

によりて、彼は誓をもてし給へり。三、かくの如く、イエスは更に勝れる契約の擔保となり給へり。三、また絶えず死に始けらるるのゆへに、祭司となりし者は多し、三、四、されど彼はその永に存へ給ふのゆへに、易はることなき祭司職を保ち給ふ。五、それ故に彼は彼等のために執成さんとて、恒に生くれば、彼によりて神に進み來れる者をば、全く救ふことを得給ふなり。六、そはかくの如く聖く、惡しきことなく、汚なく、罪人より離れ、且つ天よりも尙ほ高くなり給へる祭司長は、我等に適ひたる者なればなり。七、七、彼はかの祭司長等の如く、日々先づ己の罪のために懺悔を賦け、しかる後に民のためにするの必要あらせられず。そは彼は己自らを獻げて、唯一度これをして爲し給ひたればなり。八、そは掟は弱をもつ人を祭司長に立つればなり。九、されど掟の優なる賢の言は、永に完うせられ給へる子を「立てたり」。

第八章

されば語られたる事の原は、かくの如き祭司長を我等は有つことなり。彼は天に於て風光の位の右手に坐し、聖師即ち人にあらず、主の擲て給ひしところの眞の幕屋の仕人にておはします。一、そはおのの祭司長は併へ物をも犠牲をも獻ぐるために立てられたればなり。それ故に此の者も必ず獻ぐべき物あることを要し給ふなり。二、彼もし地におはしたらんば、掟に備ひて併へ物を獻ぐる祭司等の存すれば彼は祭司となり給ふことなかりしなるべし。三、彼等はモラセが幕屋を造らんとせしとき、語を黙りし如く、天なるものの模型と影とに服事するなり。そは「慎めよ、汝は山にて汝に築きたる列に備ひて

すての物を造くれ、と彼達へ給へばなり。たゞそれ今彼は更に勝れる約束の上に立てられたる契約の伸保者なるにより、更に置れたる奉仕を得給へり。そはもしかの第一のものにして、缺くるところなくば、第二のもの素めらるべき餘地なかりしなるべし。ハそは彼等得めて彼等に云ひ給へばなり、主云ひ給ふ、見よ、日は来りつつあり、かくて我はイスマエルの家に對し、またエダの家に對して、新しき契約を造ぐべし。カわれ彼等の手を執りて、これをエジプトの地より連れ出だし日に、彼等の先祖等と爲しし契約に備ひてにあらず、そは彼等は我が契約のうちに入りず、我も彼等を顧みざりし故なり、主云ひ給ふ。二〇そはかの日の後に、イスマエルの家と我が契らんとする契約は是れなればなり、主云ひ給ふ、我が捉を與へて彼等の思に入れ、且つこれを彼等の心に刻むべし、かくて我は彼等のために神としてあるべく、彼等は我がために民としてあるならん。一また必ず彼等はおのおのその隣人を教へ、またおのおのその兄弟を「教へて」主を知れ、と云ふことなかるべし。そは彼等の小より大に至るまで、みな我を知るべければなり。三そは彼等の不義に對して、われは懸深かるべく、また必ず彼等の罪と不法とを、尙ほも憶ひ出づることなかるべければなり。三彼は漸しと云ひ給ふことのうち、第一のものを舊しとし給へり。されど舊びて我ふる物は、消滅近し。

是の故に最初の幕屋には服事の義と、世に屬する聖所とありき、二そは聖と云はるる第一の幕屋の備へられ、そのうちに燈火室と祭とバツの供へとあり

第九章

たればなり。三また次の帳の後に、聖所の聖所と云はるる幕屋の備へられて、自金の香壇と、備く金にて披ひたる契約の櫃とありて、そのうちにマナを納めたる金の蓋と并したるアロンの杖と「石」脚とありき。五またその上には、贖罪所を覆へる榮光のツルビムありき、「されど」今これに就き、部分に備ひて云ふべくもあらず。六此等のものかく備へられしとき、祭司等は第一の幕屋に入りて、常に服事を遂げたり。七また第二の「幕屋」には、唯祭司長のみ年に一たび入りたれど、己自らと民の過失のために獻ぐる血を拂ふることなくしてにはあらず。ハ是れ聖なる靈は、最初の幕屋の何ほ立てる間、未だ聖所の「聖所」に入るの道の、脚はれざること知らしめ給ふなり。九此の「幕屋」は差し迫れる期のために「敷けられたる」諭なり。「されば」それに備ひて獻けられたる供へ物も犧牲も、服事する者の良心を容ゆること能はざりき。一〇「此等は」唯食糧、また飲み物、またさまざまなバツテムに保る肉なる義にして、改革の期まで負はせられたるのみ、一されどキリストは詣りて、將に來らんとする善き事の祭司長となり給ひ、手にて造られざる即ち此の「世」の創造にあらず、更に大なる完き幕屋によりて、二山羊また犢の血によりてにもあらず、されど己が血によりて、一たびかの聖所に入り來り、永の隙を見出だし給ひたり。三もし肉の辨のために覆かれたる牛、また山羊の血、また牝牛の灰「など」覆れたる者を要めなば、四況して永の靈によりて、瑕なき己自らを神に獻け給ひしキリストの血は、幸ける神に服事するために、死の行よ



り汝等の良心を淨めざらんや。五 されば此のゆへに、彼は新契約の仲僕者におはします。是れ最初の契約の下にて犯しし背を、彼の贖ひ給はんだために後りし死に「よりて」召されたる彼等が求の副業の約束を交けんためなりしなり。二 是は契約のあるところには、契りし者の死の歸らざる必要あればなり。一 是は契約は契りし者の生くるときは、決して罷あらざる故に、死人の上にて際せらるるものなればなり。一八 是れ故に最初の「契約」も血なくしては開始せられざりき。一九 掟に預ひてすべの誠を、モラゼよりすべの民に説いたらしとき、彼は嶺と山羊との血を、水及び鱒魚の毛并にヒソアと共に取りて、巻物にも、またすべの民にも、同じく濯ぎて、二〇 云ひけるは「此は神が汝等に命じ給へる契約の血なり」。三 かくて彼は祭床にも、また祭任のすべの器にも、等しく血をもて濯げり。三 されば掟に預ひて居んごすべの物は、血をもて淨めらる、血を注ぐことなしに潔しおきはなむ。三 是の故に天に於る物の模倣は、此等の物をもて淨めらるる必要あれども、天なるもの、そのものは、此等より更に勝れる犠牲をもて淨めらるべきなり。四 是はキリストは眞のもの型なる、手にて送れる聖所に入り来り給はず、今我等のために神の面前に顯はれんとて、天そのものに入り給へばなり。五 是れ彼は祭司長の年に預ひて、他の血をもてかの聖所に入り来る如く、塵を己自らを撒げ給ふためにあらず。六 是れもし祭司長の如くば、彼は世の創より「このかた」必ず塵を交ひ給はざるべからざりしなり、されど彼は今「たゞ世の完成にあたり、自らの犠牲

たよりて、罪を御寄せんために顯はれ給ひたり。七 また「たゞ死ぬること、その「死の」後の裁とは、人に定まれるが如く、一八 其の如くキリストは多くの「人」のために罪を負ふべし、一 たび厥けり給ひ、救のために彼を待つ者に、罪より離れて「たゞび顯はれ給ふべし」。

第十 章

それは是は將に來らんとする、もろもろの善き事の或る影を有すれど、その事柄の形、そのものにあざれば、限なく年に預ひて、獻ぐる犠牲をもて進み來る者をも、決して空うすること能はざればなり。二 もし「空うすることを得ば」服事する者をして「たゞび淨められて、もはや良心に罪を感ずることなからしむるによりて、彼等は獻ぐることを止めざらんや。三 されど此等の事のうちに、年に預ひて罪の贖ひ出あるなり。四 是は牡牛と山羊との血は、罪を取り去ること能はざればなり。五 かるが故に世に來りしとき、彼は云ひ給ふ「犠牲と供へ物とを汝は欲せず、されど體を我がために汝は備へたり。六 燔祭と罪のための「獻け物」とを汝は赦はす」。七 其のとき我いへり、「見よ、卷の或る所に我に就きて赦さるるなり、神よ、汝の意を爲さんとて我は到る」。八 掟には掟に預ひて獻けらるる「犠牲と、供へ物と、燔祭と、罪のための「獻け物」とを汝は欲せず、また赦はす」と云ひ給ひて、九 後に彼は「見よ、神よ、汝の意を爲さんとて我は到る」と謂ひ給へり（即ち「亦なるもの立つるために、最初のものを取り去り給ふ」。一〇 其の意をもて、「たゞびキリストの體を撒げ給ひしによりて我等は聖められたるなり。一一 また終期は若のお日に預ひて仕へんとて立ち、

かくて決して罪を取去ること能はざる同じ犠牲をば塵を献ぐ。ニされど彼は「唯」一つ、罪のために犠牲を献げ給ひて、限りなく神の右手に坐し給へり。ニその餘は、彼の血の己が足の足跡として押えらるるまで、彼は待ち給ふなり。四それは「唯」一つの献げ物にて、彼は聖められたる者を、限りなく完うし給ひ給ひければなり。五また聖なる靈も我等に證し給ふ、それは「主は云「是れかの日の後に、彼等と偕に我が契らんとする契約なり」と先づ謂ひ給ひてのち、主は云ひ給ふ「我が徒を興へて彼等の心に入れ、またその思に我これを刻むべし。モかくて必ず彼等の罪と、彼等の不法とを、尙ほも癒ひ出づることなかるべし」と「あればなり」。八されば此等の赦のあるところには、もはや罪に就きての供へ物のあることなし。

一凡の故に兄弟よ、我等はイエスの血にて、濯りし聖所に入ることを得るなり。二是れ彼は彼即ち己の肉によりて、極めて新しく、且つ生き生きしたる道を、我等のために開始し給ひたればなり。三且つ神の家を築とり給ふ大なる祭司おれば、三我等は心より怒しき良心を滅ぎ去り、また清き水にて體を濯がれて信仰の保證にて、眞の心をもて進み來るべし。三また脚かざる靈の告白を堅く保つべし、それは約束し給ひし者は價なき者にはばばなり。四また我等五に聖と良き行とを辨むることを思ふべし。五おののと同じに集まることを、或る人の習慣に依りて措つることなく、却つて相樂めよ。即ち汝等が觀る如く、かの日は近づきたれば、皆々その如くあるべし。ニそれは我等「もし眞理の知識を受けたる後に「尙ほ」在靈に罪を

犯さば、もはや罪に就きて難免らざればなり。モされど我の恐るべき待設と、逆らふ者を喰ひ盡さんとする烈しき火との「殘るあり」。六人「もし」モラセの捉を傍寄るときは、二つげ、己が埋められたる契約の血を普通のものと思ひ、眞の靈を侮る者は、如何ばかりの重き罰に償すとせらるるならんと汝等は思ふや。三〇それは「主云ひ給ふ、誰を償すは我に「委せよ」われ酬ゆべし」かくて復た「主はその民を癒き給ふべし」と、曰ひし者を我等知ればなり。三最初の日を燈ひ出でよ。三或ひは勝と銀とのらにて病物にせられ、或ひはかくの如く根無はる者の罰となれり。三一それは我が靈に汝等は同情し、また更に勝り、且つ常に存する己自らある者の、天に在ることを知りて、汝等の有る物を奪ふ者をも奪ひて受けければなり。三二是の故に汝等の大罪を擲つ勿れ、これ大なる報あるものなればなり。三三それは汝等神の意を寫して、約束を受けんために耐へ忍の裏あればなり。三三それは尙ほ少時せば、來る者は判り給ふべければなり、且つ遅からじ。三三されど謙しき者は信仰にて生くべし。されど傲もし退かば、我が魂は彼に於て煙なし。三三されど我等は退きて滅に到る者にあらず、魂を安んずらしむる信仰を保つ者なり」。

第十一章 さては信仰は望むことの根底に存するものにして、亂ざる敬柄の味なり。

二古の人これをもて隠せられたり。三我等は信仰をもて、もろもろの世界は神の嗣にて組み立てられ、視るところの事物は、現はれたる(事物)より出づるにあらざることを理解す。四信仰をもてアベルはカインより勝れる犠牲を神に献げたり、神その供へ物につきて隠し給ひたれば彼はこれによりて義しき者とせられたるなり。されば彼は死にたれども、これによりて(命)尙は語たる。五信仰をもてエノクは死を見ざるべく移されたり、神彼を移し給ひしが故に見出だされざりしなり。そは彼の移さるる以前に、神に蓋せらるることを隠せられたればなり。\*されば信仰を離れては(神)蓋せらるること能はず。そは神に違ひ来る者は必ず彼のあはすことを信し、且つ彼は己を棄むる者に對して、報となり給ふことを(信せ)ざるべからざればなり。七信仰をもてノアは未だ福さるることの語を蒙りたれば、畏みて己が家族の救のための方船を備へたり、これによりて彼は世を罪に定め、且つ信仰に循ふ義の世嗣となれり。八信仰をもてアブラハムは召されしとき、嗣業として將に彼が受けんとする處にまで出で来るべしとの(命)に服ひたり、かくて彼は往くところを知らずして出で來れり。九信仰をもて彼は(國)に在るが如く約東の地に寓り、同じ約東を共に嗣ぐ者なる、イサクまたヤコブと共に掃屋に住めり。一〇そは彼は徳ある市、即ち神がその技士にして工師におはす市を待ち望みたればなり。一信仰をもて彼、サラも約束し給ひし者の信なるを思ひたれば、種を創むる力を受け、かくて壯の期満きて産めり。二かかるが故に死にたる者の如き一(人)より、天の星の如く衆く、

また海邊の砂の数へ難き如く生まれたり。三信仰に備ひて此等の者はみな死ねり、未だ約束のものを受けざりしが、遂にこれを見せ給ひ、且つ慕ひ迎へ、地にありては旅人なり、また含れる者なりと告ぐなり。四そは彼等のかく云ふは、古里を棄めつあることを顯ならしむればなり。五彼等もしその出で來りしかの(地)を憐れひ出でたりとせば、彼等は歸るべきの期ありたるなるべし。六されど今彼等は眞に勝れるもの、即ち天なるものを得んと身を伸ばすなり。かかるが故に神は彼等の神と稱へらるることを耻とし給す、そは彼等のために彼は世を備へ給ひたればなり。七アブラハムは試みられしとき、信仰をもてイサクを獻けたり、即ち約束を受けし彼は(その)獨子を獻けたり。八彼に對して「イサクをもて汝のために種と稱へらるべし」と、語たられたるなり。九こは神は死人のうちより起すことを得給ふべしと勸へられたればなり、それ故に彼はこれを誓のうちに受けたり。一〇信仰をもてイサクも將に來らんとする將に就きて、ヤコブとエリクとを祝願せり。一一信仰をもてヤコブは死なんとすとき、おののヨセフの子等を祝願し、且つその故の頭に頼りて拜せり。一二信仰をもてヨセフは生の終らんとするとき、イスマエルの子等の田で往くことに就きて掘り出で、且つ彼の傍に就きて命じたり。一三信仰をもてモテゼの生まれしとき、父親はその美はしき兒なるを、且つ王の仰をも懼れざりしが故に、三つ月の間これを隠したり。一四信仰をもてモテゼは大きくなりしとき、バロの娘の子と云はるることを否み、五聖の時の間の樂を享けんよりは、寧ろ

神の民と共に苦しむことを擧ぐ、ニキアリストの誇をエジプトに在る異より尙ほ勝れる當と思へり、そは報を認められたればなり。ニキアリストの惡を憚れずしてエジプトを捨てたり、そは親ざるものを見るが如く堅く忍びたればなり。ニキアリストもて彼は遠處と血を灑ぐことを爲したり、是れ其子を上げず者の彼等に觸ることなからんためなりしなり。元信仰をもて彼等は乾ける地を過るが如くに、紅海を過ぎ往しが、エジプト人はこれを試みて吞み盡されたり。三信仰をもて七日の間廻りければ、エリコの石垣は崩れたり。三信仰をもて逃れ、弱よりして力つけられ、戰に於て強くなり、他國人の脅を退かしめたり。三婦等はそよりて國々を征服し、義を行ひ、約束を得、獅子の口を開きし、言火の力を燒し、獅子の口をまたサムエル、また豫言者等に就きて具に陳べんには、時足らざればなり。三彼等は信仰にれ尙ほ何をか云はん、そはキアソン、またブラク、またサムソン、またエフタ、またダビデ、女なるラハは、平和をもて問者を受けければ、服はざる者と共に亡びざりき。三さればわきれたり。三信仰をもて七日の間廻りければ、エリコの石垣は崩れたり。三信仰をもて逃等は乾ける地を過るが如くに、紅海を過ぎ往しが、エジプト人はこれを試みて吞み盡爲したり、是れ其子を上げず者の彼等に觸ることなからんためなりしなり。元信仰をもて彼等は親ざるものを見るが如く堅く忍びたればなり。ニキアリストもて彼は遠處と血を灑ぐことを

たれども、約束のものを得ざりき。四是れ我等より離れて、彼等の究うせらるることなきために、神は更に勝れるものを我等のために備へ給へるなり。

第十三章

是の故に我等はかく多くの證人に、雲の如く圍まれたれば、すべての罪荷と纏へる罪とを捨て、耐へ忍びて我等の前に置かれたる塵せ場を走り、二信仰の長にして、これを究うし給へるイエスを注めて觀るべし。彼はその前に置かれたる異びのため、恥をも遺み給はず、十字架を耐へ忍び給ひ、かくて神の位の右手に坐し給へり。三汝等憐み披れてその魂に弛のなかりんために、罪人どものかばかり已に逆らひしをも、耐へ忍び給ひし者を翫ふべし。

四汝等未だ罪と闘ひて血に至るまで逆らひしことなし。五また汝等は子に對するが如くに、汝等に彼の譏し給ひし痰を忘れたり、我が子よ、主の惡を輕んずる勿れ、また彼より利するるとき、弛む勿れ。六そはその愛する者を非は難しめ給ひ、またその受け給ふすべての子を憐れ給ふべし。七汝等もし慈しめらるるとも、神は子の如くに汝等を持ひ給ふなれば、これを耐へ忍べ。そは誰か父の慈しめざる子あらんや。八まればすべての者の享くる惡もし汝等になくば、汝等は私生兒にして正しき子にあらず。九且つ肉の我等の父は我等を惡しむる者なれども、我等はこれを敬ぶ。況して我等の靈の父に服ひ、且つ生きざらんや。一〇そは彼等は彼等にとりて、是とすると共に循ひて、數日の間懸しむれども、彼は我

等を益するために、その聖に共に興らしめんとて「我等を懲しめ給ふなり。一されどすべて  
 の懲、そのをりには寛ほしからず、されど哀しと思はる、されどこれによりて罰せられたる  
 者には、後に平和なる義の實を酬はらん。二 かるが故に垂れたる手と、痺れたる膝とを擧げ  
 と。三 また汝等の足ののために途を危くせよ、是れ足蹙へたる者の蹙ぶこととなく、反つて蹙き  
 れんためなり。四 すての「人」と共に平和と聖とを過ひ求めよ、誰にてもこれを離れては、  
 目のあたり主を見ることなかるべし。五 慎みて神の蕚に及ばざることなく、苦き根の所に芽ぎ  
 して「汝等を」惱まし、且つこれによりて多く「の人」をも汚すこと勿らしめよ。六 「また」  
 エソウの如く逕行する者、或ひは穢れたる者「のあり」され。彼は「一（碗）」の食糧のために、  
 エソウの如く逕行する者、或ひは穢れたる者「のあり」され。彼は「一（碗）」の食糧のために、  
 己が長子權を賣れり。七 是はその後、彼は聖廟を副がんことを欲したれども、棄てられしこ  
 とを汝等知ればなり。八 彼は彼は涙をもて悔ひ改の場所を求めたれども、これを見出ださざりけ  
 ればなり。九 是は汝等は罰るべき山、また燃ゆる火、また黒雲、また闇、また旋風に近づきたるにま  
 らず、一九 また喇叭の聲、また罰の聲にも「あらざればなり。此の「一」を聞きしとき、彼等  
 は更に管を加ふることなからんことを乞へり。二〇 是は「もし眼にても山に觸れなば、撃たる  
 べく、或ひは槍をもて刺し貫かるべし」と、命せられし事を彼等の堪ふこと能はざりければ  
 なり。二一 さればその現はれしところ、その如く怖ろしかりしかば、「われ甚く懼れ且つ震く」

と、モラセへり。三 されど汝等はシオン<sup>シオン</sup>の山、即ち坐ける神の市、天なるエルサレム、  
 また天使の故衆、三三 また登録せられたる天に在る長子等の會同即ち尊會、またすての者の  
 裁き人におはす神、また完らせられたる義人等の靈、三四 また新契約の仲保者にておはすイ  
 エス、またアムル<sup>アムル</sup>の血より勝りて流たる瀧の血に近づきたり。三五 視よ、汝等語たり給ふ  
 ところの者を拒む勿れ。そはもし地に於て「己に」誰け給ひし者を拒みし彼等、もし通るこ  
 となかりしとせば、況して我等天よりの彼を拒む者は「返るべからざればなり。三六 曾てその  
 聖地を震へり、されど今彼は約束して云ひ給ひけるは、「我尙ほ一たび、齊に地のみにおはす、  
 されど天をも震はん」。三七 されば尙ほ一たびとは、震はれざる物の存せんために、震はるる物  
 は逃られざる物として、極ざることを知らしむるなり。三八 かるが故に我等は震はれざる國  
 を受けたれば謝す。是れによりて我等は處上<sup>處上</sup>と怒ともて、神に激せらるるやう亂事すべきたり。  
 三九 是は我等の神は焼き盡す火にておはせばなり。

第十三章

兄弟の眼を存すべし。二 旅人を懇にすることを忘るる勿れ、そは或る人これ  
 によりて圖らずも天使等を宿したればなり。三 「己も」同に繋がる如く四人  
 等を憶へ、「また己も儘に於てある如く、苦しめらるる人々を「援へ」。四 婚姻はすべに於て世  
 ばしめよ、また房事は活れしむる勿れ。神は逕行する者、及び養冠する者を懲り給ふべし。五  
 「汝等」世過ぐし金錢に淡かれよ。現在に漸定せよ。そは「われ必ず汝を去らざるべし、ま

た必ず汝を見捨つることなかるべしと、彼謂ひ給ひたればなり。六されば影みて我云はん、  
「主は我がために助くる時におはせば、われ懼れじ、人われに何を爲さんや」。七汝等を導く者  
を楯ひ出でよ、彼等は汝等に神の書を託たりたる者なり。その振舞の結果を看て、その信仰に  
做へ。

八イエスキリストは昨日も今日も永までも、彼にておはします。九さまざまなる歌と、異な  
る〔歌〕とに撥ひ廻はさる勿れ。そは恵をもて心を堅らし、食澁をもてせさるは思き辨なれ  
ばなり、それらのうちに歩きたる者は益せられざりき。一〇我等は祭壇あり、椀屋に服する者  
は之につきて噴ふの權を有せず。一ニそはその生き物の血は罪のために祭司長に携へられて、  
かの聖所に入り、その體は祭の外にて燃き棄てらるればなり。三かかるが故に、イエスも己の  
血によりて民を聖めんために、門の外にて苦を受け給ひたり。三されば我等は彼の跡を携へ  
つづ、營の外に出でて、彼の許に来るべし。二四そは我等此處には留まるべき市を有たず、さ  
れど將に来らんとするものをば索めつづあればなり。二五此のゆへに我等は彼によりて、總え  
ず神に讚美の献げ物を献ぐべし、即ち彼の名に祭の實を告白するなり。二六また隨き行と親し  
き交とを忘る勿れ。そは此の如き献げ物を神は落し給へばなり。

一七汝等を導く者に願ひ且つ服へ、そは彼等は書を差し出だす者として、汝等の魂のために  
目を覺ましをればなり。是れ彼等の此の事を覆きてにあらす、喜びて爲さんためなり。然もさ

れば汝等のために益なかるべし。一八我等のために祈れ、そは我等すべての事に只く振舞は  
んと欲して、良き良心を保つことを確信すればなり。一九されと速に汝等の許に我の戻さん  
ため、此の事を爲さんことを誼るばかりに汝等に勸む。二〇されば平和の神、永の契約の血  
もて、善の火牧者なる我等の主イエスを、死人のうちより連れ歸り給ひし者は、三二その面前  
に嘉せらるることを、イエスキリストによりて汝等のうちに爲し給ひつづ、その意を爲さしめ  
んだために、すべての善き行に於て汝等を全うし給へかし。世々の世々に至るまで榮光彼に  
おはせ。三兄弟よ、われ汝等に勸む、この弊の害を堪へ忍べ、そはわれ汝等に少し許き賜りたれ  
ばなり。三三汝等イエスの釋されたるを知れ。彼もし速に來らば、われ彼と共に汝等を目の  
たり見らべし。三四汝等の、導く者のすべてと羣徒等のすべてとに挨拶せよ。人々イエスキリス  
トに挨拶す。三五恵汝等のすべてのうちに「おれ。アメン。」  
ヲモテに托してヘアル人に、イタリヤより豫き贈れり。

ヘアル人に贈れる使徒パロウの書牋 終り

使徒ヤコブの公同書狀

第一章

ヤコブ、神、また主イエスキリストの奴僕、〔書狀を〕散りたる十二の族に

「贈る、平安〔なれ〕」

ニ我が兄弟ト、汝等さまさまの試に陥るとき、すべてこれを喜と勘ふべし。三「これ汝等の信仰の驗は耐へ忍を離すことを知ればなり。四されば汝等の完く貞つ剛にして、少しも軟くるところなき者たらんため、耐へ忍をして完く剛かしめよ。五されど汝等のうち誰かもし智識を缺かば、すべての者に惜むことなく、また難ずることなくして與へ給ふ剛に求めよ、されば與へらるべし。六されど信仰をもて少しも疑ふことなくして求むべし。それは疑ふ者は風に逆はれて、鏝へる海の波の如き者なればなり。七そはかの人は主より何物をも愛くべく思ふべからざればなり。八一心の人はその「歩む」すべての道に定なし。九されど弟キ兄弟はその強くせらるることを影とすべし。一〇また富める者はその卑くせらるることを「誇とせよ」そは草の花の如く過ぎ去るべければなり。一一そは眼の昇りて高くが如く高くしければ、其は枯れ、その花は落ち、その葉はしき相も失せられたればなり。かくの如く富める者もその狂きつあるうちに消え失すべし。一二試を耐へ忍ぶ人は剛なる者なり。そは是とせらるるときは、主が巴を覆

する者に約束し給ひし生の冠を受くべければなり。

三 誰も試みらるるとき、我は神に試みらるるなり、と云ふ勿れ。そは神は惡の試を受け給

ふことなく、また自ら難をを試み給はざればなり。四 されど人おのおの己が怒に誘はれ、

かくて試みらるるなり。五 されば懲罰みて罪を塵み、罪成りて死を生む。一 夫

且つ離され、かくて試みらるるなり。二 夫は善き賜物と、すべて完き賜物とは、上よ

愛せらるる我が兄弟よ、愛はざる勿れ。三 すべて善き賜物と、すべて完き賜物とは、上よ

り、もろもろの光の父より降るなり。彼の前には一の變化、または回轉より生ずる影もな

し。六 彼は「その」目に宿ひ、我等をその創造し給へる物のうちの初穂たらしめんとて、腹

理の言にて我等を生み給へり。

一 夫されば愛せらるる我が兄弟よ、すべての人をして聞くに速に聽たるに速く、怒るに速か

らしめよ。二 人は人の怒は神の義を行はざればなり。三 かるが故にすべての穢と、益る

惡とを捨て、柔和をもて心に植ゑられたる哥、即ち汝等の魂を救ひ得る「言」を受けよ。

三 夫等、言を行ふ者となれ。唯聞くのみにして己自を欺く者となる勿れ。三 夫はも

し言を聞いて行はざる者あらば、此の者は恰も鐵のうちに己が瀬をつらつら視る人に似たれ

ばなり。三 夫は己自らを彼はつらつら視たり、且つ去れり、かくて直に彼はその如何なるもの

の如くありしかを忘れたればなり。三 夫されど自由なる完き錠を懸に見て、そのうちに居る者、

此の者は行を爲す者にして、聞きて忘るる者にあらず、此の者はその爲すところのうちに福な

らん。二 夫等のうちにて、誰ぞ信心深き者なりと思はるとも、その舌に鞭せず、また

その心を欺かば、此の者の信心は徒なり。三 神即ち父の前に居く、且つ巧なき信心は、孤と

穢とをその塵のうちに顧み、己自らを護りて世に汚されざること是れなり。

第二章

我が兄弟よ、榮光の主イエスキリストの信仰を保つに、偏

頗をもてする勿れ。二 夫は人もし汝等の會堂に金の指環を「はめ」罪やかな

る衣服にて入り來り、また貧しき者も織き衣服にて入り來らんに、三 汝等は其の罪やかなる衣

服を捨てたる者を注必視て、彼に、汝は此の良き處に坐せよ、と云ひ、かくて貧しき者に、汝は

そこに立て、と云ひ、或ひは我が足蔭の下に坐せ、といひたらんに、四 汝等は己自のろ

ちに異論を立て、且つ難しき勸考の疾き人となりしにあらずや。五 聞け、愛せらるる我が兄弟

よ、神は此の世の貧しき者を選びて、信仰に富ましめ給ひ、且つ彼はこれを己を愛する者に約

束し給ひし、神の國の世嗣たらしめ給ひしにあらずや。六 されど汝等は貧しき者を顧んじた

り。汝等を度ぐるは當める者にして、汝等を鐵劍所に曳きしも彼等にあらずや。七 彼等は汝等

の上に稱へらるる其名を罪すにあらずや。八 汝等もしたに聖潔に宿ひて、汝自身の如く汝の

隣人を愛すべし、との律き錠を懸らば、その爲すところ良し。九 されど汝等もし憐憫あらば、

汝等は罪を行ふなり。即ち「行く者として錠より吟味せらるるなり。一 夫は誰にても錠を全

く護りて、尙ほその一つに跌かば、すべての錠を犯せる者となればなり。二 夫は義する物



れと曰ひし彼は、殺す勿れとも曰ひたればなり。されば假令姦淫せずとも、尙ほ「人を」殺さば、捉に背く者となるなり。ニ汝等、自由なる捉によりて將に裁かれんとする者の如く、それの如く酷たり、且つその如く爲せ。三それは裁は豈を爲さざる者に對して懸なければなり。されば裁は裁に勝ち誇るなり。

二我が兄弟よ、人もし信仰ありと云ふとも、行あらずは何の益あらんや、その信仰能く彼を救はんや。二五されば兄弟或は姉妹、もし裸にて日々の食物を舐かん、一汝等のうち之を祭壇に獻けしとき、行にて義とせられたるにあらんや。三「されば」汝、信仰は彼の行より離れたる信仰は、死物なることを知らんと欲するか。二我等の父「アラム」はその子と同一に働き、且つ信仰は行にて完うせられしことを視るなり。三また「アラム」は神に任せまつれり、されば彼に義と擲へられたり、と云ふ聖書は成説し、かくて彼は神の友と呼ばれたり。二四されば觀よ、人は行にて義とせられ、唯信仰のみにて「義とせらるるに」あらざること

とを。三五また等しく遊女なる「ラム」も便を受けて、他の道よりこれを去らしめしとき、行にて義とせられたるにあらんや。二六それは豈より離れたる豈は死物なるが如く、その如く行より離れたる信仰も死物なればなり。

第三章

我が兄弟よ、多くの「人々」教師となる勿れ、我等は大なる裁を受くことを汝等知ればなり。二それは我等はみな屢々「罪」を犯し、誰ぞもし言に欺なくば、此の者は完き人にして、全體に對し能ふ者なり。三見よ、我等は馬を已に馴はしめんため、に、轡をその口に懸く、かくて我等はその全體を廻はすなり。四見よ、船もその形は大きくありて、烈しき風に違はるとも、最小き舵にて、舵手の思の欲する方へとこれを廻はずなり。五かくの如く舌も小き舌にして、勝ること大なり。見よ、小き火の、如何に大なる林を燃すかを。六舌は火、不義の世界なり。されば舌は我等の腹のうちに懸かれて、全體を汚し、また人生の基を火に投ずるものなり、即ち「アラム」の火に投ぜらるるなり。七それは觀よ、また島も、また船よものも、また海のものも、そのさまさまの類みな制せらるればなり、即ち人類に制せらるるなり。八されど舌をは何人も制すること能はず。即ち抑へ難き惡にして、死の毒の盈てるものなり。九これをもて我等は神即ち父を觀し、またこれをもて神の儀に備ひて造られたる人を誦す。一〇觀することと雖もことと同じ口より出で来るなり。我が兄弟よ、此等の事かくの如くあるべきにあらんや。二泉は同じ穴より甘き「水」と言き「水」とを噴き出ださ

んや。二我が兄弟よ、無花果樹はエライオンを出だし、或ひは稱樹は無花果を出すと  
能はんや。かくの如く鹽〔水〕と甘き水とを出だす泉は一つもあることなし。

見はすべし。二四されど汝等もしその心のうちに、昔き如と激心とを採たは、眞理に違ひて  
誇る勿れ、また憐る勿れ。二五此は上より降れる智慧にあらず、地なるもの、血氣なるもの、  
惡鬼に屬するものなり。二六そは妬と嫉心とのある處、そこには妬とあらゆる惡しき事柄と  
「あればなり」。二七されど上よりの智慧は第一に深く、次に平和、寛容、柔順にして、怒と讒  
き傲と盛ち、偏らずまた憐なきものなり。二八されど義の實は平和を爲す者のために、平和の  
うちに播かるなり。

第四章

汝等のうちの軍と争は何處よりするや。汝等の股のうちに闘ふ、汝等の快樂  
より来るにあらずや。二汝等は斗む、されど得ず。汝等は殺しました斯む、さ  
れど得ること能はず。汝等は争ひまた軍す、されど得ず。是れ汝等は求めざるによりてなり。  
三汝等は求む、されど受けず。是れ汝等の快樂のために毀さんとて、惡しく來むるが故なり。  
四姦盜を犯す男と、姦盜を犯す婦人、汝等世を友とするは神に敵することなるを知らざるか。  
是の故に誰にても世の友たらんことを思ふ者は神の敵となるなり。五或ひは汝等聖者の「我等  
のうちに住み給ふ處は樂をもて戀ひ慕ひ給ふ」と云ふを誣しき事と思ふや。六されど彼は眞に

大なる恵を與へ給ふ。かるが故に「神は傲慢なる者を拒ぎ給へど、謙る者には恵を與へ給ふ」と  
云ふなり。七是の故に汝等神に服へ。惡魔に抵抗せよ、されば彼は汝等より遁れ去らん。八  
神に近づけ、されば彼は汝等に近づき給はん、罪人よ、汝等の手を清めよ、また二心の者よ、  
汝等の心を空しくせよ。九苦しめ、また苦しめ、また泣け、汝等の笑を語に、また寧を愛に易  
よ。一〇已を主の面前に卑うせよ、されば彼汝等を高うし給はん。

一兄弟よ、互に諷る勿れ。兄弟を諷り、また己が兄弟を救く者は救を諷り、また救を救く  
「なり」。されど汝もし救を救かば、救を行ふ者にあらず、されど救き人なり。二救を立て給  
ふ者「と救き給ふ者」とは一におはして、彼は救ひ給ふことと、亡ほし給ふことを爲し能ふ  
なり。されど他を救くところの汝は誰なるか。

三 いざ來れ、今日または明日、我等はそれがしの市に往き、かくて汝等かしこに留まり、  
賣り買ひして利を得んと云ふ者よ、四汝等は明日の市を知らず。汝等の衆は如何にぞや、  
そは暫の間現はれ、やがて消え失する勢なればなり。五汝等の云ふことの代りに「主もし好  
とし給はば、我等生まん、かくて此のごと嘆ひはかのごとを感まん」と云へ。六されど今  
汝等は高聲をもて誇る。すべてかくの如き誇は惡なり。七是の故に眞き事を爲すことを知り  
て爲ざれば、これ彼のためには罪なり。

第五章

いざ來れ富める者よ、汝等の上來らんとす苦のために哭きつつ泣け。二

汝等の富は朽ち、また汝等の衣は蝨となり、<sup>三</sup>汝等の金と銀とは錆びてたり。かくてその穢  
 汝等に運らひて塵となり、且つ火の如く汝等の肉を喰ふべし、汝等は末の日に於て財を蓄へた  
 汝等に見よ、汝等の穢り入に働きたる人々の、汝等に差し押へられたる賃銀は叫び出だし、且  
 つ所りし人々の叫は萬軍の主の耳に入れり。<sup>五</sup>汝等は地にて春に目を送り、快樂に目を過ぐし、  
 居らるる日に在りて尚ほその心を肥せり。<sup>六</sup>汝等は義しき者を罪に定め、且つ殺せり、彼  
 は汝等に抵抗せず。

セ是の故に兄弟よ、主の來臨のときまで恐れ。見よ、塵夫は地の實き實を待ちて、朝また夕  
 の雨を待つるまで忍ぶなり。<sup>八</sup>汝等も恐れ、汝等の心を堅うせよ、そは主の來臨は近づきたれ  
 ばなり。<sup>九</sup>兄弟よ、他に對して欺く勿れ、是れ汝等の罪に定めらるることなからんためなり。  
 見よ、裁き人は戸の前に立ち給ふ。<sup>一〇</sup>我が兄弟よ、主の名に於て語たりし豫言者等を、勞苦  
 と怒との模製とせよ。<sup>一一</sup>見よ、我等は耐へ忍ぶ者を福なる者なりと云ふ。汝等ヨブの耐へ忍を  
 聞けり、また汝等は主の終を見たり、即ち主は懼に滿ち、慈悲深くおはせり。<sup>一二</sup>されど何事  
 よりも尤つ我が兄弟よ、欺く勿れ、或ひは天をも、或ひは地をも、或ひは他の何物をも、指し  
 て「誓ふ勿れ、即ち汝等をして然り然り、また否否にてあらしめよ。是れ慈悲に汝等の陷らざ  
 らんためなり。<sup>一三</sup>汝等のうちに勞苦を受くる者あるか、祈らしめよ。喜ぶ者あるか、讚美せ  
 しめよ。<sup>一四</sup>汝等のうちに朽める者あるか、集會の長老等を迎へしめよ。されば汝等は主の名

使徒ヤコブの公同書狀 終り

に於て彼にエライオンを送りて、彼のために祈るべし。<sup>一</sup>五信仰の礎は崩れ去つたる者を救ふ  
 べし、即ち非は彼を起し給ふべし、且つ犯せし罪も赦されん。<sup>二</sup>「是の故に互に「己が」曲  
 事を告白せよ、且つ汝等の隠されんがために、互に証せよ、義しき者の祈願は例きて大なる力  
 あり。<sup>三</sup>モエリヤは我等と等しき情の人なりしに、隣をもて雨らざること祈りたれば、三年  
 と六ヶ月の間地に雨らざりき。<sup>四</sup>かくて彼は復た祈りしに、天は雨を與へて地その實を生ぜ  
 しめたり。<sup>五</sup>兄弟よ、もし汝等のうちに眞理より逃ひ出づる者ありて、誰ぞこれを引き回せば、二  
 彼をして知らしめよ、罪人をその迷の道より引き回す者は、魂を死より救ひ、また衆くの罪を  
 掩ふべしと。

使徒ペテロの公同書狀 第壹

第一章 ペテロ、イエスキリストの使徒、<sup>使徒</sup>書狀を「ボント、ガラテヤ、カドモヤ、

アシヤ並にピテニナの散り散りに舍れる者に、ニ父なる神の豫知に預ひ、靈の聖めをもて、イエスキリストの血の滙し順とのため、選ばれたる者に贈る。汝等に基と

平和の増されかし。

ニ神即ち我等の非イエスキリストの父は祀せられます者、彼はその大なる慈に預ひて、死人のうちよりイエスキリストの甦によりて、生ける衆のために我等を再び生み給ひ、且我等のために死に麗りおかれたる朽ちず、また汚れず、また衰まさる罫業に入らしめ給へり。且我等は末の期に啓示せらるべく備へられたる衆のために、信仰によりて神の力にて働ふるなり。＊是をもて汝等は現に暫の間、さまざまの試のうちを遂に遭ざるを得ずと雖ども、大に歡べ、七即ち汝等の信仰の驗は、亡ぶる金の火にて驗するよりも貴くしてイエスキリストの顯はれ給ふときに、讚美また敬また榮光となりて見出されん。＊汝等は彼を見ざりしかど愛し、現に彼を觀るにあらざれども尙ほ信じ、言ひ難事の響をもて汝等は歡び且つ榮光とせり。＊九「是れ」汝等は信仰の終、魂の救を受けたればなり。一〇此の教に就きては、汝等の深く之を慕に就き

て、福音せし豫言者等も衆め、且つ懇に探りたり。一〔即ち彼等は〕キリストの受け給ふべき苦と、それらの事の後に〔受け給ふ〕榮光とを擁め護しつゝ、彼等のうちにおはすキリストの靈の、彼等に知らしめ給ひし期の、何時また如何なるかを探りたり。三 彼等は此等の事を已らうのために事ふるにあらす、汝等のためなりしことを啓示せられたり。その事は天より彼はされたる靈鑑をもて、福音を宣傳し人々によりて、今汝等に知らしめられしことにして、天使等も懇に看んことを欲するものなり。

三 かかるが故に汝等の思の腰に帶し、奉而にて、イエスキリストの顯はれ給ふときに、汝等に齎らざるを甚に望め。一 汝等は願の兒として、始の無知なりしときの態に倣ふことなかり、二 反つて汝等を召し給ひし聖者に備ひて、自らもすべての振舞に於て聖者となれ。二 如何となれば録して、汝等聖者となれ、そは我は聖者なればなり、とあるが故なり。一 また汝等もおのおの行に備ひて、偏頗なく發き給ふ者を父と呼はば、畏をもて汝等の魂の抑を過ぐせ。二 〔そは〕汝等は先祖等より傳はれる、汝等の徒なる振舞より、銀または金など朽つべき物にて取はれたるにあらす。三 汝等と雖もまた汚なき小羊の如き、キリストの食き血にて〔膾はれたる〕ことを知ればなり。三 〔彼は〕如何にも世の創の前より豫め知られ給ひしが、我等のゆゑに來の期に顯はれ給へり。三 汝等は彼を死人のうちより起し給ひ、且つこれに榮光を與へ給ひし者、神を彼によりて信するなり。されば是れ汝等の信仰と家とは、神に在

らんだためなり。三 汝等は靈によりて眞理に顯ひ、その魂を潔めて純なき兄弟の隣に入りたれば、清き心にて互に懇して愛せよ。三 汝等は朽つる種にあらす、朽ちざる〔種即ち〕神の生ける水に存する言によりて、再び生まれたるなり。三 如何となればすべて肉は草の如く、またすべて人の祭光は草の花の如きが故なり。草は萎み、且つその花は落ちたり。三 五 されど主の詞は永に存す。此の詞は汝等に宣傳せられし福音なり。

第二章

是の故にすべての聖意と、すべての論と、偽謬と、嫉と、すべての非とを傍寄せ、二 生まれしばかりの赤兒の如く、速に合へる眞實なる乳を録ひ慈ふべし。是れ汝等のこれをもて育たんだためなり。三 汝等もしまは慈愛におはすことを味ひ〔知り〕しならば〔その如くすべし〕。

四 彼は生ける石として來り給へり、人に乘せられ給ひしが、神の前には選ばれたる寶き〔石なり〕。五 汝等自らも生ける石として建られ、靈なる家となれ。〔是れ〕イエスキリストによりて、神に協約せらるる靈なる帳幕を獻げんとて、聖き祭司の務をなすためなり。六 かかるが故に聖書に、見よ、われキリストに選ばれたる寶き隅石を置く、さればこれを信する者は必ず堅しめられし、と載せらるるなり。七 是の故に信する汝等には寶きなれど、願はざる者には家を造つる者の乘てたる石、此の者は開の首石となれり。八 また壞の石、頭の石となれり。九 彼等は願はざるが故に首に刺き所にて、これ水ために彼等は立てられたるなり。十 されど汝等は選ばれ